佐伯泰英『密命』シリーズ　剣技の研究その四-3

2009 年 5 月 5 日

第五の刺客鐘巻治左衛門は、越前富田（とだ）流の遣い手である。

富田流というのは、中条兵庫助長秀（鎌倉時代の人）が創始した中条流の流れを汲み、越前の富田家に伝わった小太刀で有名な流派である。

戦国時代その名を天下に響かせた富田五郎衛門勢源という小太刀の名人が出て、いつしか中条流は富田流と呼ばれるようになった。

その弟子に鐘巻自斎通家という出来物がいて（戸田流と名乗った）、二人の有名な弟子を育てた。

その一人が宮本武蔵と巌流島で戦って敗れた佐々木小次郎である。

小次郎を富田勢源の直弟子とする説が一般的であるが、年齢的に不自然であり（その節が正しければ小次郎は 60 歳を超えた老人でなければならない）、勢源の

孫弟子とするのが自然である。現に、この本でも著者は師を自斎としている。

師匠の自斎が小太刀であるのになぜ小次郎が大太刀を遣ったかということについては、大太刀に小太刀で打ち勝つ方法を考案しようとして弟子の小次郎にあえて大太刀を遣わせて稽古をしたために、小次郎が大太刀を使いこなすようになったといわれている。

もう一人は伊藤一刀斎景久である。この人は剣術史上最も名高い人物の一人であり、あえて説明するまでもないであろう。

この二人の師というだけでも自斎は記憶されていい剣客といえる。

第五の刺客として登場する鐘巻治左衛門は自斎と同じ姓を貰っており、いかにも富田流の達人を想起させるのに十分である。

治左衛門は敦賀城下の小道場主であった父左膳から厳しい手解きを受けた。父の死後貧しさのあまり敦賀を出て、井伊家彦根の町道場を覗いて他流試合を申し込み、相手をする剣士をことごとく打ち込んで何がしかの金子を得た。

その様子を見ていた京の漆問屋右近（宗春の息がかかっている）が近づき、金と女と古一文字則宗の力で、惣三郎暗殺を引き受けさせる。

場所はすでに白須賀宿蔵法寺境内と定まっており、夜明け前に二人は名を名乗りあって向かい合う。

治左衛門は亡父の教えを守り、「仕掛けずに耐えて待」つ戦法をとる。

「治左衛門は不動と化した。

惣三郎も地擦りに構えたまま、動きを止めた。

二人が静止すると、境内の空気までも流れを止めた。

半刻（一時間）、一刻（二時間）がゆるやかに過ぎていき、東の空が白んできた。

惣三郎の息が弾んできた。

（今少しの辛抱じゃ、老狐は息が上がっておる）

治左衛門の中段の剣はぴくりともしない。

地擦りのかます切っ先がわずかに揺れた。

（ほれ、見よ。腕が萎えてきたわ）

治左衛門の額の汗が玉になって流れ出した。

それが眉毛にかかった。

（視界を閉ざされる）

恐怖に顔を振り払った。

その瞬間、惣三郎の剣が伸びやかに動いた。

治左衛門は、

（今じゃ、このとき・・・）

とばかりに突進した。だが、惣三郎のかます切っ先は元に戻り、治左衛門の突進を待ち受けていた。

（しまった！）

動きを止めるわけにはいかなかった。

すでに間合いの内に入っていた。

「えいっ！」

中段の一文字則宗五太刀の切っ先が伸びてきた。

（突きか）

違う。

わずかに軌道が上向きに流れて惣三郎の右喉首を刎ねる必殺の一撃に変化した。

寒月霞斬りの一の太刀が突進してくる鐘巻治左衛門の下腹部を襲い、治左衛門の一撃が喉首へと伸びて刎ねた。

長い対決を外された心の動揺が治左衛門の伸びを欠けさせた。わずか三分（約一センチ）ほど足りなかった。

一瞬先にかます切っ先が裁着袴（たっつけばかま）を斬り裂き、肉を截つ。

「うっ！」

惣三郎のかたわらを鐘巻治左衛門が駆け抜けた。

虚空に刎ね上げた高田酔心子兵庫を反転させながらも惣三郎は体をねじり、こちら側へと向き直った治左衛門の首筋に鋭く落とした。

治左衛紋門は則宗五太刀で合わせようとした。

重いかます切っ先が速さを増して古一文字則宗の美しい刀身を両断すると、治左衛門の首筋の動脈を刎ねた。　血しぶきが散った。

惣三郎は襷（たすき）にしたしごき紐をほどくと、山門下に置いた羽織をとろうとして、次なる対決の場を知らせる置き手紙に気付いた。

次なる戦いの場を高遠城下、日時は五日後の夜明け、と宗春は指定してきた。」

「駿府白須賀宿から信濃高遠城下までおよそ五十余里（二百余キロ）と踏んだ金杉惣三郎は昼夜を徹して街道を急いだ。

秋葉街道から西に分岐して松川村へと伸びる大鹿村で惣三郎の足は止まった。

街道筋にあった小さな湯治宿の玄関にふらふらと立った。

鹿塩の湯治宿を出て、最後の難所の分杭（ぶんぐい）峠を越えたのが夕暮れ前、

三峰（みぶ）川沿いを一気に下って絵島が遠流されていた長谷村に入った。」

一方、第六の刺客薩摩示現流の会得者堀内権太左衛門の準備は着々と整えられつつあった。

この流は薩摩の御留流（門外不出の流儀）として名高い。

創始者は戦国期から江戸初期にかけて活躍した薩摩藩重臣東郷肥前守重位（ひぜんのかみしげかた）である。 この人も無住心剣流の針ヶ谷夕雲、二天一流の宮本武蔵と時代を同じくする。

東郷は初期には薩摩のお家流であったタイ捨流を会得していたが、京のお寺で善吉和尚から自顕流を学んで奥義に達し、国元でタイ捨流の師範と戦って打ち破り、タイ捨流に取って代わってお家流を認められた。

藩主の意向で示現流と名を改め、その豪剣は天下に名を知られるようになる。

この巻でも紹介されているように、東郷示現流は、何本か立てられた棒杭の周りをすり抜けるようにして、すばやく袈裟で叩いて走ってゆくというだけの稽古である。

が、一撃必殺、そこには並々ならぬ力が込められており、東郷は自宅に生えている柿の巨木を日夜木刀で叩いて打ち枯らしてしまったほどである。

東郷には優れた弟子がいて薬丸兼陳（かねのぶ）といった。兼陳は後に薬丸自顕流（野太刀自顕流）を創始し、その流儀は幕末まで伝わってゆく。

稽古の仕方は、一間ほどのユスの木を何本か両端の支えにまとめて横たえ、その真ん中を渾身の力を込めてユスの木刀で素早く叩くのである。稽古を重ねているうちに動きが速くなり気が充溢してゆく。

他に抜きという業があるが、基本の稽古はひたすら横たえられたユスの枯木を

叩くくだけである。

　その一番の遣い手として名高いのは、人斬り半次郎として恐れられた中村半次郎（桐野利秋）である。

　幕末になると、東郷示現流は廃れ薬丸自顕流が主流となってゆく。

　さて本の世界に戻ろう。

　第六番目の刺客堀内権太左衛門は薩摩を知らない薩摩人である。

「薩摩生まれの父は京の薩摩屋敷の小者、母は下女であった。

　権太左衛門は、薩摩屋敷の庭の一角にある道場で育った。」

　権太左衛門は師範に剣技の才能を認められ、才能を開花させてゆくが、師匠が病死するとともに後ろ盾を失い、薩摩屋敷の藩士の稽古に加えてもらえなくなった。小者には門外不出の剣は教えられないというのがその理由である。

　権太左衛門は飽きることなく深夜の独り稽古に励んだ。師の関谷の三年忌の法要が南禅寺で執り行われたとき、南禅寺最高の僧位の紫暈禅師に声を掛けられ、寺侍として働くことになった。

　それから三年の後紫暈禅師の口から金杉惣三郎討滅のことが話される。権太左衛門はそんな強い男と戦ってみたいと思うようになる。

　そうして、高遠城下の河原で戦うことを命じられ、古一文字則宗六太刀を手渡される。

　そのときが来て、戦いの場に二人が望み、

「おはんが直心影流金杉層三郎か」

「薩摩示現流堀内権太左衛門どのだな」

と相手を確認し合う。

「いざ尋常の勝負・・・」

東空がわずかに白んだ。

十数間の間合いから二人は走り寄る。

権太左衛門は軽すぎる則宗を腰に差し、四尺の琵琶の木刀を八双に構え、

「間合い二間を切ったところで、八双の木剣が背を丸めて走る惣三郎の肩口に袈裟斬りに振り下ろされた。

烈風が惣三郎の体を押し包む。

それに抗して背を丸めた惣三郎は、六尺三寸の権太左衛門の懐に跳びこんでいった。

四尺の太い木剣の下を掻い潜った。

その瞬間、大地を裂いた木剣が惣三郎の肩を越えて落ちた。

権太左衛門の木剣を握る太い両腕が惣三郎の肩を激しく打撃した。

痛みが全身に走った。

それでも惣三郎は一寸の間合いで懐のうちに入りこんでいた。

惣三郎の手が脇差河内守国助の柄にかかり、抜き打ちに権太左衛門の脇腹を薙いだ。

だが、強靭な皮膚は国助を撥ね返して、いささかの傷も受けなかった。」

擦れ違った二人は再び向かい合う。脇差を鞘に戻した祖三郎は高田酔心子兵庫を抜いた。

「惣三郎は一撃目を躱（かわ）して相手に打撃を与える策に出たのだ。

豪刀高田酔心子兵庫とて権太左衛門の枇杷の太い木剣を受ければ、刃がへし折れる。

（どうしたものか）」

思案している内に、雄叫びを上げて突進してくる一団があった。

「『紫暈禅師は権六、おはんの腕に信をおいてなか』

先頭を走る男が権太左衛門を幼名で呼ぶと叫んだ。

『騙しよったか』

権太左衛門はふいに惣三郎のほうを向いた。

『金杉どん、勝負はおいどんの負けじゃ。おはんは早々に逃げてくりゃっせ』

堀内権太左衛門は南禅寺の紫暈禅師の命じた戦いの負けを潔く認めた。それは自らの意思に反して、援軍がやってきたからだ。

『同輩はおどんが始末し申す』

『権六、おはんの剣は示現流ではなか。下人の剣じゃっど』

かつての仲間が蔑みの言葉を発した。

権太左衛門は腰の古一文字則宗を鞘ごと抜くと、

『金杉どん、負けの証にごわす』

と惣三郎に投げた。

惣三郎は河原から土手に走った。

『おはんら、追え。河原から逃すと厄介じゃ』

刺客団は堀内権太左衛門と惣三郎に分断された。

城下から抜け出なければ、高遠藩の追尾を受けることになる。」

そうして惣三郎は

「三尺ほどの石垣の上に板囲いの小さな屋敷」に逃げ込んだ。

権太左衛門がその後どうなったか作者は書いていないが、運命は自ずと明らかだからであろう。

惣三郎には次のそして最後の戦いが待ち受けている。

（つづく）

佐伯泰英『密命』シリーズ　剣技の研究その四－4

2009 年 5 月 6 日

高遠城下の戦いの場から脱した惣三郎は、甲州街道に抜けるべく藤沢川沿いに登りつめ杖突峠に達した。

「果し合いは、京の薩摩屋敷の面々の邪魔立てに思わぬ結果に終わった」ので、双方ともに第七の刺客との決戦の場を伝える機会がなかった。

下りの坂道の途中に立つ柿の老木に差し込まれた書状に

「果たし状」と書かれており中には、

＜金杉惣三郎　諏訪上社前宮にて待つ、尾張柳生新陰流巨勢大学頭守義（こせだいがくのかみもりよし）＞

とだけあった。

いよいよ柳生新陰流の登場である。

この流は江戸柳生と尾張柳生の二つに分かれている。むろん元はといえば大和柳生の石舟斎宗厳（むねよし）が起こしたものだが、次男の宗矩（むねのり）が将軍家の指南役となって江戸へ赴き、長男厳勝の長子利厳（としとし　道統の継承者。宗矩にとっては甥）が尾張徳川家の指南役に就いて、二派に分かれたのである。

宗矩側は十兵衛三厳（みつよし）、兵庫助利厳側は連也斎厳包（としかね）という無類の達人を育てたが、江戸柳生は十兵衛の死後名だたる跡継ぎを残すことが出来なかった。

一方、尾張柳生は道統継承側としての強みもあって、剣の勢いは江戸柳生に勝るとされてきたのである。それゆえ現代の柳生新陰流は尾張を宗家として継承されている。

ちなみに、柳生流の継承者たちは石舟斎宗厳を初めとして厳の字を名前に用いることが多いが、江戸柳生ではそれを＜よし＞と発音し尾張柳生では＜とし＞と発音する。

したがって江戸柳生の資料は宗厳をむねよし、尾張ではむねとしとなる。これは尾張柳生現宗家の先代に当たる柳生厳長（としなが）氏が、自らの著『正伝・新陰流』（島津書房　平成元年発刊）で明らかにされていることである。

しかしながら、この本でもそうであるが、尾張側から書かれる場合もおおむね＜よし＞となっている。いってみれば時代小説の慣用語なのであろうが、人の名前の呼び方だけに注意を払いたいものである。

さて、惣三郎は杖突峠の坂道を下り終え、

「茅野から岡谷へ向かう諏訪湖南岸の街道にぶつかった。」

坂の途中にあった安国寺の寺男から教わったとおり左に道をとる。

「靄を透かすと鳥居が見えた。前宮だ。

苔むした石段を上がった。鳥居を潜ると右手に社があった。

神原を包む朝靄に巨勢大学頭守義の姿を探したが、人影はなかった。」

さらに姿を求めて急な参道を登るうち、

「ぎぎぎっ・・・。

　と木がきしむ音があたりに漏れた。」

奥宮の神殿前に立つ巨大な御柱が、惣三郎の立つ参道に向かって突然たおれかかってきた。

「大木二本は激しくぶつかりながら、せき止められていた神水とともに坂道を落ちてきた。

惣三郎は参道脇に掘られた溝に伏せた。

直後、轟音とともに激流が惣三郎の身を包み込み、圧倒的な勢いで惣三郎を下流へ押し流そうとした。

惣三郎は両手と両足を踏ん張り、必死で耐えた。

大木とご神水は一瞬のうちに通り過ぎていった。

惣三郎は、溝に立ち上がった。

奥宮を振り見た。

革帯で襷掛けにした武士が社殿の石段に立っていた。

『尾張柳生は姑息な手を使うのか』

答えはない。

『巨勢大学頭守義どのだな』

『問答無用』

壮年の顔は無精髭に覆われていた。

紫色の下げ緒の一文字則宗が抜かれた。

きらりと白刃が輝いた。

間合いは八間（約一四メートル）に達した。

参道下の惣三郎は不動のまま高田酔心子兵庫二尺六寸三分を抜いて、地擦りに構えた。

巨勢大学頭守義が走り出した。

葵斬り七剣の異名をとる則宗七太刀を背に担いでいる。

参道上から駆け下っての斬撃だ。見る見る間合いが縮まった。

『おおおっ！』

野獣の叫びを放った居勢大学頭は、伸び上がりざまに一文字則宗を振り下ろした。

高田酔心子兵庫を擦り上げたのはその瞬間だ。

かます切っ先が冷気を裂いて伸び上がった。

弧を描いた切っ先は巨勢の斬り下ろす剣を虚空で撥ね斬り上げて、落下してくる巨勢の脇腹から胸を斬撃した。　『ぎえいっ！』

巨勢は参道に叩きつけられた。

惣三郎の一撃が勝ったのだ。

いや、そうだろうか？

惣三郎は顔から倒れ付した巨勢の一文字則宗を手にとった。

鍔元一尺余で切断された小丁字乱れの刃は、則宗に似ていた。が、菊一文字の雅な作刀ではなかった。銘を改めるまでもなく七太刀ではない。

襲撃者は巨勢ではない、ということではないか。

（策を弄しおって）

惣三郎は徒労の疲れを全身に感じながら、ご神水に高田酔心子兵庫の刀身を浸けると血を洗い流した。」

後に捕えた刺客団の一人から、倒れかかってきた御柱にせよ偽巨勢にせよ、それが惣三郎を「疲労困憊に追いこむ」策であったことを知る。

惣三郎は捕えた「若侍の体を回すと鳩尾（みぞおち）に拳を打ち入れた。くたくたと足下に崩れ落ちた侍の懐に用意した書状を差し込んだ。

立会いの場に現れなければ尾張柳生と巨勢の卑怯未練を日本中に喧伝すると書き送ったのだ。

尾張柳生を代表する剣士としてはもはや逃れることはできまい。」

惣三郎を襲った様々な策は宗春によって為されたものであった。

指定された立ち合いの場所である、諏訪大社下社春宮前に到着した巨勢に向かって難詰した惣三郎に対して、巨勢は苛立っていう。

「『くどいぞ、金杉惣三郎。他日のことはそれがしの与りしらぬこと』

『柳生新陰流、技量やいかに』

惣三郎の大声に釣られるように巨勢大学頭守義が走った。

一気に間合いを切って、斬撃に入った。

早い。

惣三郎の想像を超えて早かった。」

苦戦を強いられながらも惣三郎は二間半の間合いをとった。

「惣三郎は巨勢の仕掛けを待った。

だが、巨勢は動かなかった。

巨勢は間合いを計り、上段の剣を懸河の勢いで振り下ろす、後の先の策である。

かます切っ先が巨勢大学頭の予測を超えて、毒蛇のように頭をもたげて身に迫った。

（なんと・・・）

驚きに巨勢の反撃が一拍ほど遅れた。

『寒月霞斬り一の太刀・・・』

太刀が疾風になって巨勢の内股を斬撃して斜めに走った。

その直後、上段撃ちが惣三郎の袈裟にきた。

惣三郎は刃の下をすり抜けた。

惣三郎は巨勢第学頭守義を振り返った。

則宗を杖によろめくように立った巨勢が、

『尾張柳生は負けない』

と言い放った。

則宗が八双に構えられた。

惣三郎は虚空に差し上げた剣を構え直す。

仕掛けたのは巨勢であった。渾身の力を振り絞って、惣三郎への間合いを詰めながら切り下げてきた。

惣三郎は則宗の動きを見つつ、振り下ろした。

（寒月霞斬り二つの太刀・・・）

惣三郎の一撃は則宗七太刀を両断して、さらに巨勢の喉首を刎ね斬っていた。

血飛沫が飛んだ。」

この戦いの一部始終を樹上から見ていたのが四辻季次卿である。

卿は、惣三郎が戦いの場に置いておいた葵斬り六太刀を奪い去り、「秋宮へきやれ」と言い残して消えた。

惣三郎は差し向けられた七人の刺客をことごとく斃してきたが、盗まれた宝剣は世に出てはならないものであった。

（おのれ、四辻季次め・・・）

そして最後の戦いが始まるのである。だが、四辻卿は変幻自在の動きをする屈強の剣客であった。惣三郎は追い詰められ、なぶり者にされたように全身手傷だらけである。

「惣三郎は死を覚悟した。

四辻卿の鶴のように痩せた体が虚空に高く高く舞い上がり、一文字則宗が天空に振りかぶられた。

その瞬間、天地を揺るがす大音声の雷鳴が響き、稲妻が諏訪下社秋宮の神域に青く光った。

惣三郎の手から脇差河内守国助が天空になげうたれたのはほとんど同時だった。国助は夜空を飛んだ。稲妻を発した雷が、

『どーん！』

という地鳴りとともに夜空を走った。

国助が必殺の一撃を加えようとした四辻季次野一文字則宗六太刀と十字に絡んだ。

まさにその瞬間、稲妻が二つの名剣の刃に止まるように落ちた。

惣三郎は四辻の痩身から赤い火花が散り出て、四方に飛び散るのを見た。

『げえっ！』

絶叫が雷鳴の間に轟き、どさりと黒焦げの四辻卿が玉砂利に落ちて、うすい煙を立ち上らせた。その手には焼け焦げ、折れ曲がった六太刀があった。」

第四巻中に惣三郎が斃した相手は、七人の刺客と四辻卿、他に七人計一五人。

（つづく）

佐伯泰英『密命』シリーズ　剣技の研究その五

2009 年 5 月 29 日

尾張の徳川宗春が仕掛けてきた七人の強力な刺客をことごとく斃した金杉惣三郎は、満身創痍ながらもその任務を終え家族の元に帰還する。死んだと思っていた惣三郎が家に帰ってきて、妻しのを始め子供たちが狂喜したことはいうまでもない。

だが、彼は新たな事件に巻き込まれる運命にあった。

江戸の町内至るところで火付け盗賊が横行し始めたのだ。しかも賊に入られた商家は家族奉公人全員が斬殺され、女は犯された後にことごとく殺されるという凶悪極まりない犯行である。

幕府の隠密の仕事から解放されることを願っていた惣三郎であるが、大岡越前から犯人覆滅の協力を依頼されれば断ることは出来ない。

この巻の物語の背景にあるのは、将軍吉宗の時代に創設されたといわれる町火消と、それまで江戸八百八町の火消を組織として管轄していた定火消（四、五千石の大身旗本が御役と務める）の勢力争いである。

いろは四十七組に編成された町火消の創設を建言したのは、吉宗の側近大岡越前守忠相であるとされる。

定火消の御役となると府内の各町から入ってくる「火事手当て」は、幕府から支給される石高を大きく上回るほど潤沢なものであり、もし町火消が組織されると、潤沢な「手当て」は皆無となってしまう。命を張ってでも町火消の存在を許すことは出来ないのである。

そうして御役を務める大身旗本が雇った剣客と、町火消側の惣三郎との死闘が繰り返されることになる。

身の保身と権益に執着する定火消の御役旗本が雇った剣客は、一羽流の会得者たちである。

一羽流というのは、鹿島新当流の塚原卜伝（戦国期に活躍）の晩年の弟子といわれる諸岡一羽が起こした流儀である。

卜伝の新当流は「一つの太刀」という一子相伝の秘伝が有名であるが、それがどういう術技なのか（口伝として伝えられているといわれる）文書としては現在に伝わっていない。

私は新当流の演武を見たことがあるが、荒々しい太刀遣いが印象に残っており、特に相手の懐に潜り込み折り敷いて喉元を突き上げる業に得心した記憶がある。

さて、諸岡一羽は晩年らい病を患い残った三人の弟子が心を尽くして看病した。しかし、その中の一人根岸兎角（とかく）は師の看病で己の才能が埋もれるのを恐れ、常陸の地から脱走する。

それを怒った兄弟子の岩間小熊が後を追いかけ、江戸城外堀の橋上で対決する。小熊は大力を生かして兎角を堀に放り投げ勝ちを制するが、兎角の弟子たちにだまし討ちに遭って落命するという話が『武芸小伝』という古書にみえる。そのエピソードによって、諸岡一羽という剣客が剣術史に名を連ねることになったわけである。

流名は江戸期を通じて残っていたとみえる。しかし、一羽流を名乗る剣客四名はことごとく惣三郎に斃される。

その業はすべて、自らの左前に地擦りの剣を置いて斬り上げる寒月霞斬り一の太刀であり、斬り上げた刃を即座に返して斬り下ろす二の太刀である。

同時に剣を振いつつも相手より0点何秒か速い斬り上げの動作で勝ちを制する。

速さの秘訣は、腰まで浸かった水中に沈めた剣を斬り上げる動作を、何年にも亘って修行した賜物であるとされる。水の抵抗力が膂力を鍛え業のスピードを格段に増幅させるのである。幕末にその名を馳せた天然理心流が、両手が回らないほどの太い木刀を用いて稽古に励むことによって膂力とスピードを鍛え、真剣を竹刀のような軽さに感じさせるのと同じ理屈といえよう。

惣三郎の寒月霞斬りの業はすべて後の先である。どのように睨み合いが続こうが、相手が焦れて撃ちかかってくるときが一撃必殺のそのときである。

真っ向唐竹割りで打ちかかってくる敵の刃を、右入り身になって瞬時にかわし、同時に迅速の太刀を左下から右上に斬り上げて後方に抜ける。もし十分に斬り割ることが出来ず相手が反転して向かってきたときは、斬り上げた刃を瞬時に返して斬り下げるというわけである。

手ごたえを十分感じられないときは、斬り上げた瞬間に反転し太刀を振り下ろさなければ相手にやられる。そのあたりのことは作者は十分心得ていて動作を正確になぞっている。

作者は剣の心得はまったくないと公言しているが、そのまま信じることが出来ないくらい太刀捌きの原理に精通してえるようにみえるのは私だけであろうか？

さて、物語の筋に戻ることにしよう。定火消御役の旗本の悪巧みを暴き成敗した惣三郎であるが、江戸府中を火の海にすべく暗躍した火付け強盗の頭歌右衛門が尾張藩の意を受けた元武士であることが明かされ、次の新たな展開を予測させて物語りは終わる。

さらに、鹿島一刀流の米津寛兵衛の下で修行する息子の清之助の成長振りが、物語の合間に巧妙に差し挟まれていることに注目しておいてよい。

（つづく）

佐伯泰英『密命』シリーズ　剣技の研究その六

2009 年 5 月 30 日

江戸を騒がせて火付け強盗殺人集団火頭（かとう）歌右衛門一派を成敗したばかりの金杉惣三郎に、新たな難関が待ち受けていた。

かつて俸禄していたときの豊後相良藩主斎木高玖に幕府から意外な嫌疑をかけられたのである。

新たに側室とした清香がキリシタンであるというのである。高玖自身には全く身に覚えのないことであるが、そこには幕閣の中枢が関わる陰謀が仕掛けられていた。

惣三郎は大岡越前の命を受け陰謀の実態に迫ってゆく。その仕事を阻もうとする敵との生死を賭けた戦いが再び繰り広げられる。

そこに立ちはだかるのが強敵京極長門である。

物語はいつもながら単線的ではなく複合的に進められてゆく。第一巻目から登場する江戸町火消総頭取芝鳶の若女将であるお杏の出産、南町奉行定廻り同心西村桐十郎の恋、火消芝鳶の若手の巨漢鐘馗（しょうき）の昇平の石見一刀流道場入門等など。

昇平が入門を許されて真っ先に課せられた課題は、重さ一貫目（約,三、七キロ）を振り続けることであった。足腰を鍛えるためには極めて有効な鍛錬である。しかしさしもの大力の昌平も百回も振り続けると腰砕けになってしまう。

振り棒で有名なのは直心影流である。幕末の剣客榊原鍵吉は重さ三貫（十一キロ余）もある振り棒を毎朝百遍振り、生涯一日も休まなかったという。端を持って振り上げれば重量は五倍にも六倍にもなる。そのため腕の太さは普通の人の股の太さほどあったという。

余談であるが、あのK1格闘家のボブ・サップの上腕回りが 56 センチあるそうな。鍵吉の腕回りも二尺弱というからほぼ同じ太さといってよいであろう。明治天皇の天覧に浴した真剣による明珍の兜割り試斬で、ただ一人数センチ兜に斬り込んだその腕前は、三貫の振り棒で日夜鍛え上げた膂力がものを言ったはずでえある。

話を元に戻す。

強敵京極長門の流儀は無外流であるが、その前は二天一流の達人でもあった。

無外流というのは、延宝年間（1673～81）の江戸でその剣名を謳われた辻月丹資持（つじげったんすけもち）が創始したものであるが、現代では居合の一派として

隆盛を誇っている。長谷川英信流、夢想神伝流とともに、三大居合流派の一翼を担っている。

流名が違うからといって業に極端な違いがあるわけではない。前二者の座り居合の独特の型を別にすれば、納刀の仕方などにわずかな違いがあるにすぎない。

しかし、宮本武蔵創始による二天一流は居合とは全く型を異にする。二刀同時の居合は基本的に不可能だからである。しかし、京極長門は無外流と二天一流を合一させた業を造り上げた。惣三郎との決闘の場面を収録してみよう。

「京極長門の開いた両足がじりじりと広がって腰が沈んでいく。

石畳にすり付くほどに上体が沈みこみ、ふうっと長門の周辺の空気が揺れた。

その瞬間、伸び上がって京極が突進してきた。

惣三郎は京極長門の左手の拳が鞘に掛かるのを待った。

走りながら柄に手がかかったとき、惣三郎の脇腹に一条の光が伸びてきた。

惣三郎は不動の姿勢のままにかます切っ先を落とすと光を払った。

きいん！

音が疾（はし）り、光が飛んだ。

京極長門は惣三郎が一撃目を弾くことを予測していた。

なんと剣を手から放ったのだ。投げ捨てながら前進すると惣三郎の懐深くに入り込み、脇差を抜き放った。

二刀流と無外流を会得した長門が創案した二剣居合の秘術であった。

惣三郎は右手に持った高田酔心子兵庫で一撃目の抜き打ちを弾くと左手で河内守国助を抜き上げていた。

二撃目の居合を受けた。絡み合った脇差二本の刃を支点にしながら、突進してきた京極長門と擦れ違った。

「糞っ！」

罵声が長門の口から漏れた。

そのとき、惣三郎の体が反転して、右手の刀身が虚空に跳ね上がった。

低い姿勢の京極長門も自ら転回して、さらなる攻撃に移ろうとしたとき、高田酔心兵庫のかます切っ先が首筋に伸びてきて、刎ね斬った。

くえっ！

奇妙な声を残した長門は石畳に突っ伏して転がった。」

このとき惣三郎も二刀を遣っているのである。

興味深いのは長門が大刀を振り投げて脇差で居合を遣ったことだ。二点一流では武蔵が得意技としていたように、左手の小刀を手裏剣のように投げ打って相手を斃すか態勢を崩させて、右手の大刀で討ち取るという業を遣う。 長門はその逆に抜き打ちざまの大刀を投げ打ったのである。奇手というしかない。

投げ打たれた大刀を払った瞬間右手で抜き撃たれた脇差が相手の脇下を斬り払うというわけである。

しかし、惣三郎はとっさに左手で脇差を抜き合わせ、相手の刃を喰い止めた早業はさすがである。次の瞬間噛み合った相手の脇差をいなすとと同時に回転して態勢を入れ替え、振り上げた刀で相手の首筋を刎ね斬るという芸当をやってのけたわけでる。

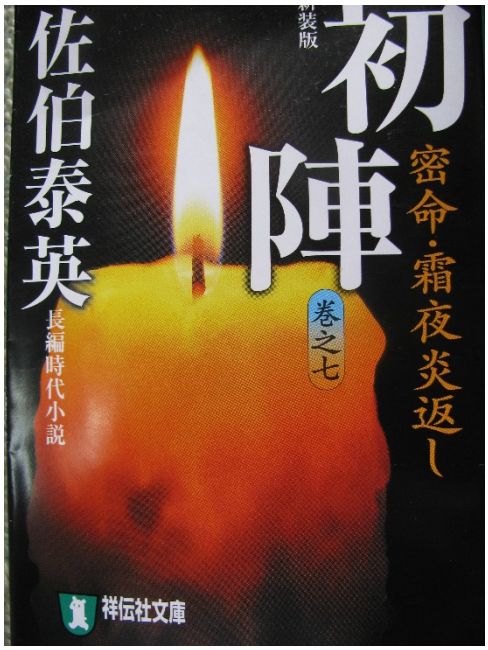
こうして刀法を検証してみると矛盾や齟齬は見出すことが出来ない。見事な佐伯流刀術というべきであろう。

この巻で、惣三郎が斃した相手は都合九人。

（つづく）

佐伯泰英『密命』シリーズ　剣技の研究その七

2009 年 6 月 5 日



『密命』巻の七のタイトルは「初陣」となっている。

鹿島に剣の修行に出ている金杉清之助が、師匠の米津寛兵衛に伴をして米沢へ出掛ける旅の途上、女の悲鳴を聞いて駆けつけたところ、年頃の娘を交えた旅の一行が追いはぎ浪人に襲撃されようとしていた。

清之助は師の寛兵衛の許しを得て浪人の頭分を討ち止める。

19 歳になったばかりの清之助が人を斬った初めての体験となる。まさに初陣であり、剣者としての宿命を背負う出発点でもあった。

三年余の必死の修行の成果が実り、鹿島一刀流の米津寛兵衛道場では清之助の右に出る者はいないほどの上達振りなのである。

清之助は修行に明け暮れる一方で、父金杉惣三郎の必殺剣「寒月霞斬り」に匹敵する業を編み出そうと研鑽に余念がない。人気のない深夜の道場に百目蝋燭を立て、燃え上がる炎を抜き打ちで両断する稽古を繰り返す。

ついに稽古が実を結ぶ日がやってくる。

両断された炎は刀身が燃え上がるかのごとく刀の面を走りぬけてゆき、頭上で返された刃は一旦消え「霜夜に針が落ちる寸前の静寂を忍ばせ、虚空に停止していた」大剣が真っ向唐竹割りとなって垂直に落ちてくる。

その刃をかわすことは誰にも出来ない「秘剣霜夜炎返し（そうやほむらがえし）」と名付けられて大成することになる。

一方父親の惣三郎は老中水野忠之の剣術指南として雇われることになり、車坂の石見銕太郎道場と水野家の道場を師範として交互に指導に当たるようになる。

おりしも水野家から支度金として二百両もの大金を頂戴し帰宅途中何者かに襲われ、自ら剣を抜く暇もない速い太刀捌きで斬撃を受ける。惣三郎は腹部から胸部にかけて断ち割られるが、懐に仕舞いこんでいた二百両が命を救ってくれた。

その恐るべき刺客は内裏一剣流と名付けられた奇剣を遣う一条寺菊小童という京出身の剣客であった。この剣者は金で雇われての人殺しを生業としており、「殺人の快感は生きる証し」とする殺人鬼である。労咳を患っていて余命幾許もなく、もともと言葉がしゃべれない。この人物の奇剣については後に詳しく解説したい。

さて、この巻のテーマの一つは「享保剣術大試合」というものである。

時の八代将軍徳川吉宗が自ら発案し、老中水野忠之が主催するという形をとるが、真の勧進元は吉宗その人であるとされる。（享保剣術大試合は実際に行われ

たものではない。三代将軍家光の時代に行われた「寛永御前試合」を参考に作者が考え付いたものであろう。）

最終的に各流派を代表する三十人の剣士が選ばれる。流派名を眺めるだけでも壮観である。ちなみにそれを列挙してみよう。カッコ内は流祖名。

新当流（塚原卜伝）、愛州流（愛州依香斎）、大和・江戸柳生流（柳生宗矩）、神道無念流（福井兵右衛門）、神後流（神後伊豆守）、タイ捨流（丸目蔵人佐）、鹿島一刀流（米津寛兵衛）、鉄人実手流（青木常右衛門）、東軍流（川崎鑰之助）、直心影流（山田平左衛門）、空鈍流（小田切一雲）、津軽卜伝流（？）、古藤田一刀流（古藤田勘解由左衛門）、風山流（？）、吉岡流（吉岡憲房）、無住心剣流（針ヶ谷夕雲）、甲源一刀流（逸見多四郎）、忠也派一刀流（伊藤典膳）、尾張柳生流（柳生兵庫助）、三徳流（？）、本間流（本間勘解由左衛門）、二天一流（宮本武蔵）、心形刀流（伊庭是水軒）、四兼流（？）、示現流（東郷東兵衛）、片山伯耆流（片山伯耆守）、無外流（辻月丹）、真庭念流（樋口又七郎）、ざっと以上のごとくである。

流派が三十に満たないのは、重複する流派があるためである。金杉惣三郎は審判役、息子清之助は鹿島一刀流代表である。

試合は吉宗上覧のもと怪我人はもとより死人も出る波乱を含みながらも、最後に残ったのは東方金杉清之助、西方尾張柳生の柳生六郎兵衛厳儔（よしとも）の二人である。

柳生が面、清之助が胴の相打ちであったが、清之助は自ら飛び下がって「参りましてございます！」と白州に平伏する。

柳生六郎兵衛は日本一の剣者となり面目をほどこし、吉宗から長光の太刀を受けて下がった後、清之助には自ら腰に差していた脇差相模国広光を贈った上、自分の名を一字採って宗忠と名乗るように告げた。

一条寺菊小童に再び登場してもらわなければならない。惣三郎が危うく一命を失いかけたほどの遣い手である菊小童は、自分こそが日本一の剣の遣い手と思っており、剣術大試合に出られない恨みから、出場者の暗殺を企て何件か成功する。

さらには大試合の優勝者柳生六郎兵衛を入浴中に奇襲して死に至らしめ、最後の目標とばかり金杉父子を付狙う。

菊小童が遣う内裏一剣流には鞘の内と鞘の外という二つの型がある。鞘の内というのは、左手で腰の刀の鍔を握り、機が熟した瞬間鍔をひねって刃を下にしそのまま抜き上げて切り付ける業。忍者などが用いる逆手刀法である。座頭市が得意とする刀法なのでその遣い方を思い出してもらえば分かりやすい。

ただし忍者や座頭市と決定的に異なっているのは、左手で抜き打つというそのことである。右腕がない丹下左膳も左手で抜刀するが、柄を上から握ってのまともな抜刀である。

刃を下にした逆手抜刀は下から上に瞬時に抜き上げることができるので有利であり、なおかつよもや左手で抜刀するとは考えられないので相手はフイを衝かれる。

今まで聞いたことのない奇手といえるが、剣術に疎いと作者自ら告白する(『密命』読本)割には良くぞ考えたと感嘆せざるをえない。おそらく、剣の術技に詳しいブレーンを抱えているのであろう。

鞘の外というのは、抜刀した剣を片手地擦りに構え、剣先の棟に左手を添えて斬り上げるというものである。左手で剣を押し出すような形になるので剣のスピードが格段に増す。

その両業を遣いこなす菊小童は、絶対的な自信を持って清之助に立ち向かう

が、霜夜炎返しに破れて脳天を唐竹割りにされ、「ほげえっ！」という言葉を一言発して絶命する。

　そうして、清之助の武者修行の旅が始まる。

　この巻で惣三郎が斃した相手は二名、清之助二名。

（つづく）

佐伯泰英『密命』シリーズ　剣技の研究その八

2009 年 6 月 6 日

享保剣術大試合を乗り切った金杉家に新たな危難が降りかかる。

長女のみわが外出のおり、ごろつき浪人に絡まれているところを美形の若い武士に救われる。みわはその武士に一目惚れしてしまうのである。

家でもじっと考え込んでいるみわの姿が尋常ではないように感じられ、義母のしのは夫の惣三郎に相談する。始めは年頃の娘にはありがちなことと高をくくっていた惣三郎も次第に心配になってきた。

一方で惣三郎は尾張柳生の高弟たちに付け狙われ問答無用の真剣勝負に持ち込まれる。六郎兵衛を襲ったのはいまやこの世にはいない一条寺菊小童という流れ者の剣客であるとその都度弁明するが、相手は聞き入れない。やむなく立会い

無益な血が流される。

　尾張柳生の四天王のうち二人が惣三郎との立会いで斃され、ついに四天王の第一番とされる大河原権太夫が惣三郎の前に現れる。

　大河原の口から尾張柳生当主を襲ったのは菊小童であることを承知の上で、惣三郎に戦いを挑んでいることを打ち明ける。

「なれば、なぜそれがしに刺客を送って来られるな」

「尾張柳生は、尾張藩の庇護の下に栄えてきた流儀にござる」

「尾張の命となれば、逆らえぬと言われるか」

「忠義とは哀しいものでござる」

　人に見られる恐れのない決闘場に赴く道すがら、会話はさらに続く。

「大河原どの、柳生六郎兵衛様を襲いし者は、一条寺菊小童」

「その者をそなたの倅、清之助どのが打ち倒されたそうな」

「そこまでお分かりなれば、なぜそれがしを目の敵になさるな」

「尾張柳生の矜持にござる。六郎兵衛様が出自も定かではない京侍に殺され、それを清之助どのが倒された。尾張柳生は地に落ち申した」

「だが、それがし親子のせいではござらぬ」

「尾張柳生の名誉を回復するために金杉惣三郎、清之助親子を我ら宿念の敵と定め申した。そこもとらの意志とは関係なきこと、また、ことの真相がどうであるかにも関わりなきこと、われらが突き進まなければならぬ茨の道にござる」

　大河原権太夫の足が止まり、右手の編笠が投げ出された。

「金杉惣三郎どの、そなたの宿命と諦めなされ」

「迷惑至極」

「これが武門に生きる者の考えにござる」

　大河原は剣を抜き放った。

「尾張柳生の欺瞞にござるぞ、大河原どの」

「問答無用」

「そなたとなぜ剣をまじえなければならぬのか」

　惣三郎の呟きは哀しげに響いた。

　もはや大河原の口から言葉は発せられなかった。

　言わずと知れたことであるが、対決は惣三郎に凱歌が上がる。

　実際の剣技の様を描写しないで二人の会話を長々と移したのは、こらからも何巻にもわたって惣三郎、清之助親子に次から次に尾張柳生の刺客が襲いかかることになるからであり、武士の面子、つまりは武士道というものの歪められた側面を余すところなく描いているからである。

　この歪められた武士道こそこの小説のシリーズで繰り返し描かれる武士同士の戦いの背景を成す。

　さて、恋に落ちたみわのことである。思い焦がれていたみわはまたしても偶然自分を救ってくれたあの美形の若い武士と出遭う。二人は会話を持ち次に会う場所を決める。そうして逢引した場がみわにとって危難の場所となるのである。

　その内容がどういうものであるか記したいのは山々であるが、この巻ではミステリー仕立てになっているため記述がためらわれるのである。本をよんでもらうしかない。

　結果的にその男軽部駿次郎と惣三郎は対決することになる。軽部は二刀を遣

う。

「惣三郎の地擦りに対し、低い姿勢で対決した駿次郎は、易々と間仕切りを切って、攻撃に移った。
　右手の大刀と左手の小刀が鋏のように左右から惣三郎の不動の足を襲う、
　秘剣蟹鋏（かにばさみ）
　で迫った。
　両の剣が合わさるところに惣三郎は立っていた。
　寒月霞斬り一の太刀は動けない。
　地擦りを振り上げて、駿次郎の大刀と合わせれば、小刀の刃が惣三郎を襲う。反対に小刀を撥ねれば、大刀が飛んでくる。」

　惣三郎はとっさに大刀を捨てると虚空に飛んだ。駿次郎は空を斬って交錯した剣を虚空へ振り上げようとするが、脇差を抜き放った惣三郎は、「伸び上がってきた駿次郎の眉間に瞬速の勢いで叩き付けた。
　ぱあっ
　と血が飛んだ。」

　旅の途上にある清之助は九州に渡る。晩年に肥後の地で余生を送った宮本武蔵の事跡をたどり、また上泉伊勢守門下の四天王の一人であった丸目蔵人佐の生まれ故郷である肥後人吉藩を訪れ、丸目家の跡を継ぐという道場で稽古に励んだりしている。
　それらの地で幾つか試合を行い自らが編み出した秘剣「霜夜炎返し」でことごとく

勝ちを制する。

この秘剣については次巻あたりで少し検証してみたい。

さらに清之助は、金杉家の故郷である豊後相良藩を流れる番匠川に腰まで浸かって、二十数年前父親の惣三郎が会得した寒月霞斬りをなぞってみるのである。

父親は川面に映る寒月を水中に潜らせた真剣で斬り上げて両断することに成功したのであったが、倅の自分は木刀で月映を両断する試みに挑戦することにしたのである。

この巻で惣三郎が屠った相手は七人、清之助二人計九人。

（つづく）

佐伯泰英『密命』シリーズ　剣技の研究その九

2009 年 6 月 9 日

将軍吉宗は襲位すると直ちに紀州から供奉した薬込め役十六人を幕臣に取り立て、御庭番として任命した。

映画や小説で活躍する吉宗直属の隠密といわれる者の存在がこれである。

ところが、そのうちの一人が御用を務めて復命に上がったと思しき場所で殺された。

その場所は、江戸城内奥深くにある吉宗の居間近くの御休息御駕籠台という、一般には立ち入ることが出来ない場所であり、立ち入ることが出来る役職者は限られている。

惣三郎は犯人の探索を大岡越前守から依頼される。

惣三郎の探索行の合間に倅清之助の動向が平行して語られる。

清之助は九州一円を旅し、宮本武蔵の養子伊織が建てた小倉碑板を読んで、武蔵・小次郎の決闘があった船島（巌流島）に渡り、往事の決闘の様を思い描きつつ自身の差し料である新篠五綱光二尺七寸五分を素振りする。

この刀は、父親の惣三郎が家族を連れて鎌倉に物見遊山に出掛けたときに、地元の刀匠綱光に鍛造させたもので、清之助が享保剣術大試合に出場するために江戸へ帰ってきたときに記念に贈ったものである。

鞘の拵えは黒刻塗、柄は鮫張に藍皮巻、鍔は埋忠明寿の車透かしという凝った造りである。

清之助はすでに「秘剣霜夜炎返し」という必殺技を身に付けており、その型は居合でいう初発刀と同じである。まず水平に抜き撃ったとき刃の上を炎が走り、いったん刀が見えなくなって次の瞬間頭上に止まった刀が「暗夜に霜が降りるごとく」音もなく静かにすいと振り下ろされ、相手の眉間に吸い込まれてゆくという恐るべき剣技なのである。

有り体にいえば、水平に抜き撃った刀が背に回され、頭上から垂直に振り下ろされるだけの話であるが、抜き撃った刀に炎が走るとういのであるから、相手はまずこれに度肝を抜かれてしまう。

相手が炎立つ刃に気を取られていてはっと気付いたときには、清之助の刃は振り下ろされるばかりに頭上で待ち構えているわけである。

迎え撃つ態勢を取ろうとしたときはもう遅い。目を剥いてわが眉間に刃を受け入

れるだけである。

抜き撃った刃に炎が走るというのは劇画的なこけおどしといえなくもないが、実は、自分の剣先から炎が出るぞ、あるいは剣先から輪が出るぞ、と門弟や後輩に告げる剣客が実在したのである。

剣先から炎が出るのは、幕末期中西派一刀流道場の師範であった天真一当流流祖寺田宗有であり、剣先から輪が出るのは寺田の門弟であった白井亨である。

二人は想像に絶す修行を経て心法の剣を磨き、鬼気迫る剣技を身に付けたのであった。剣術史上有名なこのエピソードを作者の佐伯はどこかで目にしたものと思われる。従って、これまた想像を絶する修行に身をおいた清之助の剣に炎が走っても不思議ではないと考えたのであろう。

その清之助は船島でも尾張柳生七人衆の一人に戦いを挑まれ、自ら編み出した秘剣で斃している。

肝心の惣三郎であるが、物語の絡みに重要な役割を演じる信抜流居合の達人小出直三郎と刃を交えることになる。信抜流は戦国時代の人奥山左衛門太夫忠信（奥山休賀斎？）の創案とされる。

筆者はその流名を聞いたことがなくどのような型があったのか皆目見当がつかないが、この本で述べられている小出直三郎の必殺技は「脛斬り」と名付けられ、言葉通り抜き付け様に相手の脛を狙って斬り上げるというものである。

その型が一風変わっている。

「小出直三郎が奇怪な行動をとった。

腰の一剣を抜くとその場に正座した。そして、剣を左に、柄を前に刃を外にして置

いた。」

　つまり、腰の剣を鞘ごと抜き去り刃を外にして左膝の脇に横たえて、次の瞬間左手で刀を取ると同時に右ひざを立て抜き付けるという業である。

普通は刀は腰に差したままであるが、小出の場合には正座した膝脇にいったん刀を置くのである。

その利点は考えにくい。

敢えていうならば、地表すれすれから刀を抜き上げるのでかわす間もなく脛を斬られてしまうということであろう。

しかし、置いた刀を取る動作は腰に差した刀を抜くよりも 0 点何秒差か遅れることになる。居合の長所である瞬時の抜き付けという観点からすると疑問を感じざるを得ない動作である。

鍛錬すれば腰に差した刀以上に速く抜きつけることが出来る、ということを作者は伝えようとしているのかもしれない。

しかし、置いたまま刀の鯉口に手を掛け瞬時に右手で柄を持って斬り上げるということであれば問題はない。だが作者はそのことを記述していない。その型に無理を感じている証左といってもよい。

ところが刀を正座した右膝の傍らに刃を外にして置けばどうか？相手は当然のことながら左利きと思い、相手方は抜き打たれた刀は、自分の左ひざから右股にかけて斬り上げてくるという予想が着く。従って対処の仕方を考えることが出来る。

刀は右膝脇にありながら斬り上げた瞬間は右手で柄を握っているという業があるのである。それはわが刀道の秘伝の一つである「右膝抜き打ち」（筆者命名）という業である。

その業をここで語ることにしよう。

正座して大刀の刃を内側にして右膝脇に横たえる。この所作は相手に危害を加える意図はないということを表しており、武士の一般的な作法でもある。

しかし、次の瞬間両拳を床に突いて両腕を支点として座ったまま刀を右に飛び越える。すると刀は刃を外にして左膝脇に横たえられた形になり、そのまま左手で刀を取って右手で柄を握って斬り上げることが可能となる。

斬られることになる方は、向かい合った相手が座ったまま右に飛ぶまさかの動作に幻惑され一瞬戸惑うはずである。それが相手の命取りになる。

小出がこの手を遣っていればさすがの惣三郎も斬られていたかもしれない。

残念ながら、先ほど述べた小出の抜き打ちは高く跳躍した惣三郎にかわされ、小出は、真っ向唐竹割りに落ちてきた高田酔心子兵庫に額を割られて果てるのである。

この巻で惣三郎が刀の錆としたのは五人、倅の清之助は九人。計十四人。

（つづく）

佐伯泰英『密命』シリーズ　剣技の研究その十

２００９年６月２７日

この巻で惣三郎は、これまで対決してきた中で最強の敵と向かい合うことになる。

その名は鷲村次郎太兵衛。

影ノ流と称する剣法を遣う。影とはすなわち陰でありその内容は伊勢の土豪愛州（あいす）氏より起こった陰流（かげのりゅう）に他ならない。

この流の創始者は愛州移香斎久忠である。この人が歴史に名を留めることになったのは、剣聖上泉伊勢守秀綱の師匠であったからである。秀綱は移香斎から陰流を伝授され新陰流という新しい流派を開いた。

数々の伝説を残しながら新陰流は柳生石舟斎に相伝され、剣豪小説の主役ともいうべき柳生新陰流として流布されてゆくのである。

陰流の剣法がどのようなものであったかということについては、柳生新陰流の伝書にその名のままに記載されているから（一刀両段、斬釘截鐵、長短一味など）、技法を研究することは容易い。

しかし、師を持つことなく、大自然の中で独自に自流を生み出した愛州移香斎という漂泊の剣家が秀綱に伝えたものは、動きの激しい荒っぽいものであったことは想像に難くない。燕飛,、猿廻などという名の技法がその辺りの事情を告げている。

移香斎は九州日向にある鵜戸（うどの）の岩屋に参篭して、霊感によって兵法を自得したとされる。東上して剣法を広め、晩年は再び日向の地に帰り、鵜戸神社の神官としてとして八十七歳の天寿を全うしたという。

これが一般に流布された説であるが、秀綱を教えたのは移香斎の息子元香斎（小七郎宗通）であるとする説が有力である。年代から推定してそうならざるをえないということらしい。後の剣聖を育て上げたほどであるから、父親に勝るとも劣らない優れた兵法者であったと思われる。

小七郎は常陸国大田城主佐竹義重に仕え、後に主の国替えに従って出羽に移り住み七十二歳で卒したといわれている。

さて、物語の世界に戻らなければならない。

この巻の発端は鹿島の地にあってその剣名を全土に謳われた米津寛兵衛の死から始まる。寛兵衛は惣三郎の倅清之助の師であり、才能が突出していたとはいえ、清之助を江戸の享保剣術大試合に鹿島代表として送り込むことが出来るほど鍛え上げた大師匠である。

その師匠が他流試合を求めて乗り込んできた影ノ流鷲村次郎太兵衛に撃ち殺されてしまったのである。というより、寛兵衛を撃ち殺すため道場に乗り込んできたわけである。

そのことを回国修行中の清之助に手段を尽くして伝えるとともに、惣三郎は倅の師匠の仇を討つことを自らに誓う。

天下の名人を一刀の元に打ち倒したその技量が並々ならぬものであることを知るとともに、自分を付け狙い監視する影の存在に緊張を強いられる。

ついに見え隠れする鷲村の実態がおぼろげに浮かんでくる。

先祖が尾張徳川家の祖義直の近習衆として仕えていたが、慶長十五年名古屋城が築城された折、鷲村家は廃絶になって武鑑から消えた。その訳は、鷲村家は尾張徳川を護持する影の一族を命じられたからである。

「鷲村家には表（おもて）一流と称する秘太刀が一子相伝で伝えられておったそうな。この表一流、甲斐の武田信玄公が戦場往来の節、使ってきた実戦剣術と古き書付に残されておるだけで、その実態はとんと分かりませぬ」

と作中人物に語らせている。

「表一流の秘太刀を継承してきた鷲村が影遣いを命じられたときから、影ノ流と名を変えたか」

と惣三郎は自問するように呟く。

つまりは、この鷲村もまた尾張の命を受けて将軍家に戦いを挑もうとしているのである。将軍吉宗の身辺を守り続け幾多の刺客を斃してきた惣三郎を始末しないことには、一等上にたどり着くことは出来ない。

大岡忠相の先祖の墓参りを機についに鷲村と惣三郎の決闘が行われる。

鷲村は陰流の古い型を思わせる右腰溜めの剣を構えて突っ込んできて、惣三郎

が寒月霞斬り一の太刀で斬り上げるそのはるか上を軽々と飛び越えて背後に着地したり、股を開き腰を落とし剣を頭上に垂直に構えて鋭く斬り込んできて、惣三郎に反撃の余裕を与えない。それどころか、惣三郎は幾つもの手傷を負って追い詰められるのである。しかし、最後に勝ちを制するのは無論惣三郎だ。

「迅速の二つの刃のわずかな遅速が非情にも生死を分かった。
死を覚悟した者の剣が勝った。
次郎太兵衛の痩身が地表から浮き上がった。
高田酔心子兵庫が次郎太兵衛の右脛から左脇腹へと真一文字に斬り上げて、その体を宙に飛ばしていた。
さらに虚空に疾った刃が反転し、着地した後、よろめくように後退する次郎太兵衛の肩口を重く斬り下げた。
『寒月霞斬り二の太刀』
が決まった。
次郎太兵衛の肩から、
ぴゅうっ
と血飛沫が拡がり飛んだ。
風もないのに八重桜がはらはらと舞い落ちた。」

　一方四国に回国中の清之助も次第に戦いの数が多くなり、斃した敵も父惣三郎より多くなってゆく。
　この巻で惣三郎が屠った敵の数は三名。清之助は、判明するもの七名他に数名。

（つづく）

佐伯泰英『密命』シリーズ　剣技の研究その十一

２００９年７月４日

熊野秘法剣

第十一巻のタイトルは「残夢」であるが、サブタイトルに「熊野秘法剣」とある。

この巻では五十路を迎えた惣三郎が熊野三山で修行を積んだ山伏たちを相手に大暴れする。

「一団の頭領は熊野本宮、新宮、那智の三山の千日回峰を何回も果たした上に、観音の浄土にむかう補陀落渡海船（ふだらくとかいせん）に生きながら乗せられ、生きて戻ってきたという石突不動なる生き神様」

というわけである。

山伏たちは江戸のあちこちで火薬を用いて火付け騒ぎを起こし、江戸中を騒乱の巷に化そうとする。火付けどころか御三家紀伊藩の下屋敷を襲い、見習い奉公に来ていた娘たちを片っ端から陵辱したあげくことごとく喉を掻き切って殺してしまうという残虐なことまでやってのける。

凌辱され皆殺しにされた娘たち

いうまでもなく紀伊藩は時の将軍吉宗の出身藩である。凶賊たちの狙いはまさにそこにあるのである。

大岡から密命を受けた惣三郎の緻密な探索が始まる。

娘たちが陵辱されたあげく皆殺しにされたとき、そのうちの一人が厠に立っていて惨劇を逃れたのであるが、そのショックから記憶を失い事件の真相はなかなか判明しなかった。

しかし惣三郎一家の手厚い保護で順調に回復しついに記憶を取り戻し、現場で見聞きしたことをすべて書き記して惣三郎に差し出し、ことの真相が始めて明らかになったのである。その背後に寺社奉行牧野英成が絡んでいることが判明し、大目付から呼び出しを受けた牧野は将軍吉宗の命として謹慎を仰せつかる。

吉宗体制に逆らう尾張藩

探索の結果山伏たちは、角筈村（つのはずむら）の十二社（そう）権現の熊野滝に集結しつつあるということを突き止める。

惣三郎が角筈村の熊野権現社に乗り込むときがきた。

その前に、記憶を取り戻して見聞きしたことをすべて書き残して決定的な証人と

なった鶴女を、実家に送っていかなければならない。書付を残して役割を終えた鶴女を石突不動一派が襲うことはもはやないと考えてのことである。 鶴女の駕籠を守って代々木村へ向かって急ぐ惣三郎の前にやはり配下を引き連れた不動が現れた。

二人の間に問答が交わされる。

何故、紀伊藩と繋がりの深い熊野の修験者が吉宗体制に逆らうのか？

二人の問答から、修験者たちの背後に将軍位をうかがう尾張藩主兄弟（現藩主継友、弟宗春）の声掛りがあることが匂わされる。

絶体絶命の間合い

惣三郎と修験者たちとの戦いが始まる。石突き不動の片腕、牛王聖が大薙刀を振るって惣三郎に襲い掛かる。

惣三郎をぐるりと取り巻いた山伏たちは直刀を抜き連れて右回りにあるいは左回りに回転しながら、

「八代暗殺、江戸灰燼、尾張繁盛、必ずや大願成就・・・」

と呪文のごとく唱えながら、円の真ん中にいる惣三郎圧殺の機をうかがう。

惣三郎は無念無想となるため目をつぶり、空気の振動で牛王聖の動きに反応することを決意する。

「牛王聖が一気に間合いを詰めて、薙刀を惣三郎の眉間へと振り落とした。

空気が動いた。

惣三郎は一歩後退すると間合いを外した。

胸前を反りの強い薙刀の刃が走ったのを感じた。

だが、さらに後退を続ければ惣三郎の背後で風車のように回る直刀の餌食になった。また横へ飛んでもそれは変わらなかった。

それが熊野三山山伏円陣の恐ろしさだった。

寒月霞斬り一つの太刀

かます切っ先は未だ地擦りにあった。

腰を沈めて待った。牛王聖が薙刀を斜めに構え、さらに踏み込む気配を見せた。

牛王聖が踏み込みざまに薙刀を斜めに落とした。

惣三郎の左肩を斜めに撫で斬る勢いで刃が迫ってきた。

惣三郎は腰を沈めたまま走った。

薙刀の大きな刃の下に身を投げると、地擦りの高田酔心子兵庫二尺六寸三分に円弧を描かせた。

斜めに落ちる薙刀の刃と水中から水面に映る月を両断すべく修行を重ねた秘剣、

「寒月霞斬り一の太刀」

が虚空で交わり、

がつん！

と鈍い音が響き、なんとかます切っ先が大薙刀を捉えて斬り飛ばしていた。

「おうっ」

と驚きの声を牛王聖が洩らしたとき、惣三郎は両眼を閉じたままに虚空へ撥ね上げた兵庫を反転させ、五感が教える牛王の気配へと振り下ろした。瞑目して遣われる秘剣ゆえ、

「残月夢想斬り」とも呼ばれた。

惣三郎の掌に感触が伝わり、

げええっ

という絶叫を耳にしながら、斬り下ろした。

高田酔心子兵庫が牛王聖の額を真っ二つに斬り割っていた。」

水中から飛翔した山伏を両断

石突不動の一統が掻き消えた後、駕籠の中に声を掛けてみると中はもぬけの殻であった。さらわれたのである。 惣三郎は単身鶴女を救い出すべく十二社熊野権現へと向かう。

薄暗い森の中を惣三郎は滝音を目標にしてしゃにむに突き進む。三丈の高さから流れ落ちる滝壺が次の戦いの場である。水中に身を浸して剣を斬り上げ斬り下ろす修行を続けて会得した秘剣「寒月霞斬り」を披露する絶好の舞台である。

それなりに説得力を持つが、三尺の深さの水中にいったん全身を沈み込ませ、反動をつけて剣を持ったまま虚空に飛び上がり、同様に水中から飛翔した三人の山伏を空中で撫で斬りにするというシーンは相当に無理がある。

いかに跳躍力に優れていても、ずぶ濡れの着物を着たまま剣を担いで水中から高々と飛翔することなど天狗にも出来る技ではない。

しかも、「滝の水の落ち口」（この戦いの前に滝の長さ三丈と説明されている）に鶴女の首に直刀を擬した石突不動が立っており、惣三郎は水中から再び跳躍して、三丈の高みにいる不動を襲おうとするのである。

まるで劇画のシーン

ここまでくると最早劇画やCG時代劇の一シーンに過ぎない。剣技研究の何の参考にもならないのである。

小説であるといってしまえばそれまでだが、小説であるにも関わらず剣技研究の素材を与えてくれる『密命』シリーズであるからこそ、筆者の筆が進んできたのである。

しかしまあ、このシーンは大目に見ることにして次巻に進もうと思う。

この巻で惣三郎が斃した修験者は十人。木刀で打ち倒した者数人。

（つづく）

結婚式の詩即興朗唱

２００９年７月５日

シェラトンホテルの結婚式

このところ剣技研究シリーズが長く続いているので、息抜きに目先を変えた話題を提供しよう。

去る６月２０日浦安のシェラトンホテルで、一組の結婚式が執り行われた。新郎は関根秀一さん、新婦は松田和稀さんという。

新婦の父君松田忠徳さんから家へ電話が掛かってきたのは三ヶ月まえの桜が蕾を付けはじめた頃だったように思う。

松田氏とは30年以上も前、私が結婚して住んでいた北海道で知り合った。知り合ったというより私が一方的に氏にファンレターを書いたのであった。

詩人は存在するだけで反体制

当時氏は洞爺湖温泉の地にあって全国発信の新進気鋭の詩論家、翻訳者、写真家として著書も幾つか出版していた。北海道を代表する新聞でも常連の寄稿者であった。

私はいつも氏の文章を注目して読んでいたが、ある日北海道新聞（道新）の夕刊に世界の抵抗詩人たちについての論評が掲載され始めた。何回かに亘る連続評論である。扱っている詩人はマヤコフスキー、ネルーダ、ロルカ、金芝河など7,8名であったように思う。

私は毎回欠かさず貪るように読み、論評の的確さと同時に
「本来詩人というのは存在するだけで反体制なのである」
といった文章に目から鱗が落ちる思いがして、連載終了とともに連続評論に対する賛同と賞賛の手紙を書いたのである。

ネルーダの全集をすぐにでも出せる

私は当時盛んに詩を書いていて詩集を三冊ほど出版していた。いっぱしの詩人を気取っていたのであろう。氏からすぐさま返書が届き、手紙のやり取りが始まった。

有珠山の爆発があったその翌年に山を案内してくれたこともある。山の立木がすべて、衣服を足元に脱ぎ捨てたように、表皮が丸ごと剥げ落ちている光景を前にして立ちすくんだことを憶えている。

また、ネルーダ詩集を翻訳で読んで気に入っていた私は、ネルーダの新しい詩集を翻訳出版しないのかと訊いたところ、実はネルーダは自分も好きで、全集を出せと出版社から要請があればすぐにでも出せる用意がある、と答えたことに仰天したことを鮮明に思い起こすことが出来る。

やがて彼はモンゴル人の奥さんと結婚して一女を成した。彼女が二、三歳の頃会っていると父親はいうのであるが、私にはその記憶がない。そのときの幼女こそ新婦の和稀さんなのである。

モンゴル詩人を招き朗読会

有珠山訪問から数年後私は離婚して東京に出てきたのであるが、氏との文通は

続いていた。

私が東京で詩朗唱活動を行っているということをどこかで聞き知った氏から、モンゴルの詩人を東京に呼ぶからどこかで朗読会を開いてくれという要請があり、横浜の画廊でモンゴルの詩人二人を招き朗読会を持ったこともある。 しかし住んでいる場所が北海道と東京というように離れていることもあり、次第に疎遠になっていったのは致し方のないことであろう。

ただし、年賀状のやり取りは毎年欠かすことはなく、氏が札幌に住居を移しいつの間にか温泉博士となり、著書もたくさん出し、札幌国際大学の先生として活躍される様は把握できていた。

朝青龍の謹慎問題が連日マスコミで取り上げられていたとき、民放TVで松田氏がゲスト出演していて、朝青龍の健康問題やモンゴルの温泉などについて話しているのをたまたま観る機会があった。司会者の紹介や松田さんのもの慣れした口調から、氏がすでに誰もが知る顔になっていることを知った。

式場での朗唱要請

そうした矢先に氏から電話があったわけである。まさに20数年ぶりに聴く松田氏の肉声であった。

氏は電話で娘の結婚式に出て欲しいということを述べ、会場で詩の朗唱をしてもらいたいといった。聞くところによると、天下の大詩人谷川俊太郎氏が出席予定とのことである。

そういう人の前で朗唱するなど畏れ多いとしり込みして、今刀をやっているのでそちらの方の演武はどうかと提案してみたところ、私の裁量に任せるということであったので、礼装用の作務衣羽織を着込み、バッグに帯を投げ込んで刀を持って

ゆくことにしたのである。

刀の演武の用意

梅雨の真っ最中であったがこの日は幸いに朝からさわやかな良い天気で、新しいカップルを天も祝っているかと思われるばかりであった。

杉並の自宅から浦安まで一時間半ほどかかる。敷地のすぐ隣はディズニーランドだ。目だって多い子供連れや若いカップルと一緒に電車を降り、くの字型のホテルに向かう。

ちょっと早目に着いたのでホテル内のカフェテラスでビールを飲む。

演武の型をなぞっておきたいので早目に式場に入らせてもらったのであるが、ステージと思しい場所は平台を三つほど並べたような狭い空間なのである。稽古をしてきた通りの演武をやれば、ステージから転がり落ちてしまうことは必定であった。

医学部教授と温泉地社長

そういうときに破れかぶれになるのが私の性格である。なるようになるしかないと思い定め、ステージ脇の空間で、転がり落ちるはずの型を十分ほどなぞった。

程なくして招待客たちが入ってきたので帯を解いて定められた席に着く。

次から次に客が入ってきて着席するが、おそらく300名に達していたであろう。

着席表を見ると面白いことに気付いた。メインテーブルを挟んで客層が二分されているのである。メインテーブルから見て右側が新郎関係でその肩書きのほとんどが大学の医学部の先生方、左側が全国の有名温泉旅館の社長や女将方なのである。ということは新婦（その父親）関係であることは一目瞭然である。

刀術演武の用意

新郎は医者の卵で大学院生とのことであり、新婦も医学生として研究に携わり、どこかの研究所で出遭ったらしい。従って私のテーブルは温泉旅館経営者ばかりで、自分一人場違いな感じであり（着席表の私の肩書きは、全日本刀道連盟師範新婦父友人）、何かしら落ち着かずそわそわしていた。

入場前にいただいたビールが利いていたせいか口だけは滑らかで、テーブルクロスの下に横たえた刀（模造刀ではなく真剣）を膝でしっかりと抑えて、左右の人にしきりに話しかけていた。

著名な教授先生の挨拶が続く中、ホテル側の係員が私のそばににじり寄って来て、

「佐土原さまの詩朗読は一番最後になりますので、そのお積りで」

とささやくではないか。

私の役割は詩朗読と初めから決まっていたのである！そこで落ち着かない理由と狭いステージの意味が理解できた。

刀ではなく詩即興朗唱

私は追い詰められた。詩の用意は一切してきておらず、たとえ即興でやるにしてもテーマすら考えてもいない。料理が次から次に運ばれてくるが、自動的に口に運んでいるだけで味わう余裕もない。

見渡したところ天下の大詩人の姿は見受けられないので、ステージに立つこと自体障害はないが、どうしてもテーマが浮かんで来ないのである。そこで苦し紛れに隣の温泉旅館の社長に、

「即興というのはでたらめでいいんですよ。どんな口任せのでたらめを吐いたとこ

ろで、聴く人がちゃんと自分なりの筋を作ってくれますからね。人間の頭の構造はそういうふうになっているんです」
とこれまた根拠のない無責任なことをべらべらとしゃべって不安を紛らわせたりする。
　私は詩即興朗唱を行うとき、脳髄を痺れさせるほどまで酒を飲む。そうしてはじめて言葉が自在に出てくるのである。

馬頭琴優勝者の演奏

　ところが、刀をやるという前提であるから出来るだけ飲まないようにしていた。
　だが詩をやるとなるとアルコールの不足が言葉の硬直と語彙の貧弱となって表れてくる恐れがある。ここは詩に賭けるしかないと思いを定め、がんがんと飲み始めた。そうすると、ピンと脳髄にテーマが刺さってきたのである。
　どこかの大学の教授が新郎は天才的な人間であると演説していた、人間、天才、創造、医学、医学といえば右脳と左脳、粒子と反粒子、陰と陽・・・・・・決まった！
　そう思うと酒をがばがば飲んだことを棚に上げ、ついでに演武もやってしまおうという気になるから人間の気持ちは信じられない。
　宴の終わりも間近かになり、昨年度モンゴル馬頭琴演奏優勝者テムジン氏が登場。
　チンギスハーン時代を思わせる衣装に身を包み、20 歳代の若さにも関わらず風格堂々として自信が全身に漲っている。
　約五分間に亘り、見事な演奏とホーミーを披露した。

人類の滅びを詠う詩即興

私の番がやってきた。

私は刀を抱いて壇上に上がった。通訳を介してテムジン氏に競演をお願いする。

刀を足下に横たえ、音の先行を促して第一声を模索する。

「遠く宇宙の彼方に馬頭暗黒星雲がその不気味な蔭を映し・・・・馬の首を横切るようにして命の、生命の胞子がきらきらと輝きを発しながら過ぎってゆく・・・・」

この一節は私の詩即興朗唱の枕詞の一つなのである。

「その胞子が地球に飛来して生命を萌芽させ、数々の生き物に進化してゆく。

いや退化してゆく。

長い年月を経て人類の祖先が誕生し、大脳資質を肥大させて文明というものを造り上げた。

文明の本質は人間同士の戦いを制する兵器を発明することである。

それゆえ文明は必ず滅びる運命を担っている。

現代欧米文明は銃器を発明した。その延長が核兵器であり、究極の兵器である。

それは異民族同士、異教徒同士、国境を接した同民族同士の攻防を超えて、人類そのものを絶滅させる危機を孕んでいる。

地球の命運を共にする兵器の下で人間は、他の生き物たちを巻き込みながら偽りの平安を享受している。

大脳の肥大を進化というなら、人類はあらゆる対立を、男と女の、他人と自分の、陰と陽の、粒子と反粒子の、右脳と左脳の、そうして知性と感情の、対立を融和し統合し、それを壊滅的な破壊ではなく創造に融合する義務がある。

だが文明は滅びの世界を選択するであろう。

人間は、人間は・・・・・」

といった、結婚式には似つかわしくない暗い内容であったと思う。

酔った状態で演武を披露

私は詩即興朗唱を自分では決して収録することはない。即興の言葉は、再生されたとき現場の輝きを失って単なる言葉に堕するからである。そのとき現場にいた人の心の中に残ることがあればそれでポエジーは完結している。

朗唱を終え背後で幽玄な音を付けてくれていた若きテムジン氏と、硬い握手をして刀を手にする。緊張感がさっと全身を斜に走る。二間四方ばかりの小さなステージを踏み外さないように、動きの少ない型を演じてみせる。

無論酒のせいで折り敷いた姿勢から立ち上がるときにぐらりと体が揺れる。

「やはり、足に来ているようですね」

と御託を並べて笑いを取り、剣に向かう自らの不完全さを誤魔化そうとする。

観る人にとってはわずかな破綻に過ぎないが、演じる本人にとっては大きな心の傷となって残る。

最後は剣先で「祝」の字を描き演武を終えた。

とりあえず出番は終わった。食べ残していた料理を頬張りワインを喉に流し込んで一息つく。

宴が終わり出口で松田氏御夫妻が帰路に就く客たちに一人一人声を掛けて送り出していた。

「宴を盛り上げてくれて本当にありがとう！」

と握手してくれた旧友の手に、ほんのりとした暖かさを感じた。

佐伯泰英『密命』シリーズ　剣技の研究その十二（最終回）

２００９年７月１０日

ト伝流と田宮流

前巻では主人公の金杉惣三郎は齢五十に達する身でありながら、全身ずぶ濡れになりながらも水中から跳躍して、三丈もの高さにある滝の水の落ち口に立つ敵を斬撃しようとする超人的な力をみせつけた。

しかしこうした剣技が、誰が考えても劇画的なこけおどしに過ぎないということを指摘しておいた。老齢期を迎えようとする惣三郎に作者が与えようとした最後のプレゼントであったのかもしれない。

その証拠といってもなんであるが、この巻は倅清之助の活躍が大半を占めてい

る（以後の巻も同様）。

清之助は尾張の息を受けた数々の刺客と戦いながらも剣技を深め、達人の域に近付いてゆく。回国修行の場も四国から紀州へ移ってゆく。

さてこの巻では、二つの古流派が紹介されている。その一つは塚原ト伝が創始したト伝流（新当流）から派生した津軽ト伝流であり、もう一つは居合の田宮流である。二つの流派の業について筆者なりの解説を加えておきたい。

津軽ト伝流

まず津軽ト伝流である。この流名については本文で次のように説明されている。

「ト伝流は水戸藩系、津軽藩系、伊勢系と分かれて伝えられていく。

津軽ト伝流を伝えたのは延宝年間、中村治太夫という剣術家であったといわれる。

その後、中村から棟方十左衛門清久に伝えられ、十左衛門が津軽ト伝流初代に就位した。ちなみに津軽ト伝流の型は大太刀二十五本、小太刀十六本、奥伝三本、八字二刀と定められた。」

ト伝流（新当流）は現在に伝えられ、私はその型の演武を数年前鹿島で見たことがある。ただ一つ、印象に残った業がある。それは、打太刀が斬り下ろしてくるところを、仕太刀は折り敷いて（片膝をついて）低い姿勢から打太刀の喉を突き上げるというものである。相打ちを覚悟の必殺技といえよう。

私はこの技を取り入れて自らの実戦刀法形の一部に組み入れている。

ト伝流一つの太刀の秘儀

新当流で言及しておきたいことは、卜伝が残した奥伝の秘太刀「一つの太刀」についてである。

これがどのようなものであったのかは、現代の新当流宗家（吉川浩一郎氏）でも分からないとのことであり（戸部新十郎著『兵法秘伝考』）、剣豪小説作家を悩ませる一因となっているらしい。

私もその技について諸本を読み合わせてつらつら考えてみるに、一つだけヒントが見つかった。

たしか津本陽氏の本だったかと思うが、卜伝の八双（八相）の構えが、半身ではなく両足を横に揃えた武道の基本の立ち姿であるという記述を見つけた。剣は左右の横に構えるという変則八双なのである。

この構えの利点は何か？

私の考えはこうだ。相手が真っ向から脳天に割り付けてきたときほぼ同時に八双の剣を相手の脳天に向かって撃ち下ろす。あわや相打と思われるシーンであるが、実は、やや斜めから撃ち下ろされる剣は、相手の剣を横から弾く形になりしかも剣はそのまま脳天に吸い込まれるというじつに簡便にして合理的な必殺技なのである。

柳生新陰流の合撃ち（がっしうち）に似ているが、お互いが真っ向から撃ち合うので相打ちの度合いが高まる。その点からしても平行立ち八双からの斬撃は確実に勝ちを制することが出来る。これこそが幻の「一つの太刀」の秘技の一本ではないかと私は考えるのである。

田宮流居合術とは？

さて、清之助は紀州和歌山城下に入り、居合で有名な田宮流道場に拠点を定め

ようとする。

田宮流というのは、居合術の祖といわれる林崎甚助重信の直弟子の一人であった上州岩田村の人、田宮平兵衛重正が創始した剣術流派である。なぜ紀州に伝わったかというと、

「その子の田宮対馬守長勝が浜松藩主時代の徳川頼宣（よりのぶ）に仕え、元和五年の五年の頼信の紀州入りに伴い、お供してきた。こうして抜刀田宮流もまた紀州に伝わったのだ。」

田宮流の特色は長束刀（ながつかがたな）の教えにあつという。それは

「柄に八寸の徳、見越しに三重の利」

というものである。解説すると、

「同寸の刀でも柄が二寸長ければ場合に（間合いに一筆者註））二寸、先に二寸の益ありて、相手から二寸届き難く、こちらから二寸届き易い。ゆえに八寸の徳があると教えた。また長束刀を上段に構えると敵を眼下に見る利が生じ、相手は下から見上げるから場合遠く、踏み込まなければ届かぬ、それゆえこちらに利がある。反対にこちらからは場合が近いから踏み込まなくても届く利、以上三つの利がある」

ということなのである。

ではその長束刀でどのような技の遣い方をしたのか、私はその演武を観たことがない。

いくら柄が長くても鍔元を握って抜刀したのでは柄の長さが生かされない。従って抜刀に際しては長柄の柄頭の方を握って抜刀したのであろう。であれば柄が長ければ長いほど剣は長く使える。

ただその技を習得するためには血の滲む修行が必要であることはいうまでもな

い。どんな術技でも同じことであるが、この特異な抜刀法は現在ほとんど見る機会はない。

剣豪小説への期待

清之助の「霜夜炎返し」という技は基本的には抜刀術であり、その親近感を清之助に伝えさせたかったのであろう。

敵の形は色々と変わりながらも相も変わらず尾張方の刺客と戦い続ける清之助の剣は、さらに踏み込んだ修行と精神の鍛錬にとって無敵振りを示すのであるが、金杉父子の剣技の研究としては、流派や型はほとんど出尽くしている。後は目先を変えた敵との小説的戦いをなぞるだけにしか過ぎない。それゆえ、十九巻まで出されている『密命』シリーズであるが、剣技の研究としてはこの巻で打ち切ることにしたい。

『密命』を剣技の研究に絞ってきたために、物語の展開が全くといってよいほどフォロー出来なかったが、この小説の魅力は剣とともに物語の展開にあるのであって、考え抜かれた構成と主人物たちの生き方と成長過程が実に丹念に描き込まれていて、読者の気持ちを引き付けて止まない。

基本的には剣豪小説であるが、主人公と時代、また出てくる人たちが相応に年を取り、連れ合いが出来子が生まれるなどして大河の趣を呈しているところが、他の剣豪小説と一線を画するところである。その魅力が佐伯泰英の小説に共感とリアリティそして深みをもたらしているのである。

また、佐伯の他の小説シリーズでは、薩摩示現流、眼志流居合術、来島水軍流などの達人が登場し大技を振るう様が描かれる。折があれば、それらの小説にも

触れたいと思っている。

　この巻で清之助（惣三郎は一人もいない）が屠った相手は十一人。

（終わり）

政治資金庁献金局

2009年7月11日

政治献金への見返り

現代日本の政治は、政治家たちは、どうなっているんだ！

首相がめまぐるしく入れ替わり、失言や政治献金の誤魔化し帳簿の改ざんなどで、大臣たちが次々に罷免されたり辞任したりしている。

与党ばかりでなく野党でも政治献金や資金の運用を巡ってごたごたを繰り返し、政治不信を否が応でも煽っている。このままでは外国にも示しがつかないし不信感から日本の主張を通してもらえず、著しく国益を損なっているのである。

元凶は政治献金の在り方にある。

いくら政治資金法を改正是正しても、必ず違反者が現れるのは政治献金というものの性格にある。

なぜ、個人であれ団体であれ特定の個人や政党に献金するのかというと、何らかの見返りを期待しているからである。

キリスト教の奉仕の精神が染み渡っている欧米諸国では、献金というものにあからさまな見返りを求めない。それで政治がよくなれば、国益に役立てば良いとする献身と奉仕の精神に支えられている。

ところが日本という国は古より賂（まいない）政治がまかり通っており、お役人に金品を差し出せば言い分を聞いてくれるという体質が染み付いている。また

受け取る方もお金を貰った以上何らかの見返しをしなければならないとする、誤った正義感に囚われている。

「持ちつ持たれつ」という言葉があるが、まさにその論理が政治の世界にもまかり通っているのである。日本人の体質といってもよい。

イギリスの政治資金法に学べ

であるなら幾ら法律を改正しても献金という事実がある以上不正や便宜供与は無くなる筈がない。共産党と社民党は献金制度を廃止せよと言っているが、そのことに関しては彼らは全く正しい。

お金がないと政治の世界は成り立たないといわれるが、確かにそういう側面はあるであろう。アメリカの大統領選挙などは一小国の国家予算ほどの金が動く。

政治家は根本的には民衆の意思の総意によって選ばれるのであるから、金がないから活動できないというのであれば、国から資金を支給すればよい。現にそうしている。

だがそんなはした金では足りないよとばかり献金を募り、それが結局はつまずきの基となっているわけである。であれば十分に活動できる資金を国で賄えばよい、といってしまえば簡単であるが、その額が問題になる。余計な金を懐にすれば良からぬことに使ってしまうというのは人間の性であるからである。

イギリスはたしか国家から政治活動資金が支給され、それ以外の金を政治活動に使ってはならないとされている。無論税金を使っての国費であるから、使用した金の明細は厳格に報告させる。これが本来の政治の姿であると私は考える。

政治献金局の必要

何故日本でそれが出来ないのかということについては様々な意見があるであろう。政治家といえども一個の市民であるから特別扱いにしてもらいたくない、血税を出来るだけ余分に使って欲しくないという意見もその一つであろう。

献金を受け付けながらなおかつ国家から支給する金だけで政治活動を行ってもらう方法がある。

欧米のキリスト教の奉仕の精神を見習って、見返りなど必要がないから国家のため、国益のためお金を使って欲しいという人を対象に、国が献金を受け付けるのである。

そうするためには専門の役所（例えば政治資金庁）が必要になってくるであろう。政治献金局が与党野党支援者もひっくるめて献金を受け付ける。そうして、政党の規模に応じて十分な資金を配分するのである。

公正無比なお役人ばかりではないから、そうした場にも必ず汚職や便宜供与といった不正が発生することはある程度致し方がない。外部からの監査を導入して厳しく監視しなければならないことはいうまでのない。

無論献金だけで全ての政治資金を賄えるはずはない。ある程度の税金を投入しなければならないことは自明である。

自発的な献金への呼び掛け」

とはいへ、見返りを求める体質をDNAとして抱える日本人が、単に国家のためという名目で献金に応ずるであろうかという疑念が生じてくる。

今の制度に比べれば格段に献金の額が減ることは目に見えている。

だが、そこで諦めてしまっては日本民族に絶望したのも同然である。民族の誇りにかけて自発的な献金を呼びかける国民啓発運動を起こせばよい。

どのような個人どのような団体から献金を受けたかということを、各期ごとにマスコミを通じて発表し献金率の高い団体や個人を表彰すれば名誉にもなる。ただしすでに述べたように、献金された金は予野党に関わらず公平に配分するというのが原則である。

現代の政治家たちの献金を巡るごたごたを毎日のように見せ付けられていると、こうした幻想も抱きたくもなるというものである。

画廊での詩即興朗唱

2009 年 7 月 20 日

今月 17 日八王子市の小さな画廊でささやかな個展が開かれた。

個展を開いたのは同市内に住む画家春原武彦さん(上の写真でこちらを向いている眼鏡の人物)。

彼と知り合ったのは 7,8 年ほど前のことであるが、話題に共通性が多かったせいか友達付き合いをするようになり、彼も小石川の店に度々来てくれたりして結構親しい間柄なのである。

彼の大学の専攻は法科であり、一見絵画とは無縁のようであるが、まさに喉の下まで絵にのめり込んだ生活を送っている芸術家の一人である。彼はすでに 70 歳を超えているが制作意欲は旺盛で、どんなに酒を呑んで帰宅しても朝

の4時までは必ず制作に従事して、4時間ほどの睡眠時間を取り、銀座にある自分の会社に出かける毎日を送っているとのことである。まさに超人的な体力と精神力の持ち主といえる。

私などは少し飲みすぎると、翌朝公園に出向いて剣術の稽古をする予定をあっさり放棄してしまったりする怠け者であるから、彼の意志力の強さに感心することしきりである。

彼の絵は油とか水彩とかいわゆるオーソドックスなものではなく、写真や自分で描いた絵を一度コンピューターで製版処理し、さらに色彩や背景を書き加えて仕上げるという現代版リトグラフなのである。

だからといって絵が手軽に早くできるといったものではない。全工程はまさに画家の緻密な仕事そのものであり、直感的なひらめきが構図を決定するポエムとよく似ている。しかも個展の度に画題と趣向を変え、自身の模倣を出来るだけ避けようとしている姿勢が顕著に伺われ、創造的芸術家の姿勢を貫いている。

芸術に自己模倣は避けられないが、意欲を掻き立てて今までの自分とは違う新しい世界に挑戦する姿勢を持つ人こそが芸術家なのであって、絵を描いたり詩を書いたりする人がそのことだけで芸術家であるわけではない。

新しいテーマ新しい技法を開拓しようとして血みどろの格闘を日々に課す創作家を芸術家と人は呼ぶのである。

私は春原氏に芸術家の姿をかいま見る。この日はオープニングであり花を添える人物としてフォルクローレの名人ヒロさんが招かれていた。

四坪ほどの狭い空間に続々と人が集まってくる。座りきれなくて入り口の踊り

場に密集してビールをのんだりするほどの混みようであった。

主人公は銀座に職場（コンピューターによる印刷製版）を構えているだけあって、銀座の画廊では数限りなく個展やグループ展を行っているベテランかつ著名な画家なのである。期間中そうして関係の客たちがあの狭い画廊に連日押しかけてくるのであろう。対応が大変であるが遣り甲斐もある。

私は画廊に来るときはその積もりは全くなかったが、場所のアットホームな感じに刺激されて詩即興朗唱を飛び入りでやることにした。フォルクローレのヒロさんとは何度か手合わせをしたことがあるし、春原さんも数え切れないほど私の即興朗唱を聴いている。一言で話がまとまり、ヒロさんの演奏が一通り終わったところでお手合わせを願った。

この個展会場で絵を観た感想を基にした即興と断った上で、ヒロさんに音の先行を促し第一声を発する。

「昔の人たちは暗闇を恐れた。

闇の中には魑魅魍魎が跋扈し、人々を驚かせ恐怖させ

闇の神秘を嫌が応にも感応させた。

だが現代は電気を発明し闇を克服した。

克服したと錯覚した。

現代文明は闇を明くるくした代わりに核兵器というもう一つの闇を開発した。

その闇は終に克服されることなく究極の闇として人類を重く圧迫することであろう。

だが電灯に照らされた闇、さらには心の闇の中に魑魅魍魎が克服されたわけではない。

外界では、地に落ちた一枚の木の葉、木漏れ日の太陽、枝を這う芋虫を観察し見詰めていると、

そこに普段感じることのなかった闇の、

心の奥から湧き出してくる感受性の、

対象が存在していることを感じる。

さらには立ち泥む都市の空間にかわいらしい妖精が浮遊しているのを見ることが出来、

朽ちかけた壁の上に大気の精が肩を組み合ってにこやかに見詰めている姿に出くわすことも出来る。

見えないものを見、聴こえないものを聴こうとする感受性を研ぎ澄ませていれば、

現代流の魑魅魍魎はいたるところに存在している。

人々よ、

自らの感性を研ぎ澄ませ！

そうして自らの生活に豊かさと神秘への感情を呼び起こすのだ！」

といったような内容であったと思う。

私は詩即興朗唱を記録しないから思い出して再現するのである。従って当然整合性への意志が働いて、忘れていたところや欠けていた部分を補おうとする。そのことを正直に述べておきたい。

そのギャラリーは夜になるとスナックに変身するとのこと。

一番最後まで居残って二、三名残った客と話しているうちにスナックの時間に切り替わった。

当然ながら、新しく飲物を注文して一曲カラオケなど歌って余興を沿え、千鳥足で帰路に就いた。

林邦史朗芸能生活50周年記念公演『名残』

2009年7月20日

去る11日（土）と12日（日）、吉祥寺の前進座劇場でわが師林邦史朗先生の武劇公演が行われた。

先生は芸能プロ集団『若駒プロ』の主宰者であり、出演メンバーはほぼ全員が『若駒』の人たちである。

先生の著書『殺陣師見参！』(壮神社）によると、武劇という公演形態は先生が生涯に亘って追及してこられたテーマとでもいうべきものであり、歌舞伎と同じように日本人の伝統芸能の一環として継承発展させていきたいという強い意志が語られている。

　武道というのは、東洋人の、そして特に日本人の得意とする分野であり、剣

術、柔道、空手、相撲は日本人の生活・精神と密接に結びついている。

歌舞伎はどちらかというと、日本人の伝統文化の再現であり鑑賞の対象であるが、武道は日々の生活と結びついており、伝統文化であると同時に精神文化でもある。

各分野の武道をまとめて武劇という形で披露し、継承発展させてゆくことは、武道に携わる人間全ての責務であるといえよう。

時代小説、TV，映画といったメディアでは、武道を大胆にまた細部をうがって表現することが出来るが、誇張や作為が見え透いていたり、CGの技術の多用などによって、本来の形が歪められて伝えられやすく、形や技の継承発展ということではあまり期待できない。武道に携わる人たちの演武披露においても、術技の特殊性とスピードのために一般の人たちには分かり難く、観ていて余り面白いものではない。

しかし、劇の形に構成して個々の武道を分かりやすく解説し、しかも技の型を出来るだけ正確に伝える試みは、観ている人たちにとって楽しいばかりではなく日本武道再発見の場ともなるはずである。

先生は、国内はもとより、アメリカを始めヨーロッパ諸国でも武劇公演を行ってこられたが、ほぼ全作にわたるNHK大河ドラマの殺陣・武術指導という大役を担ってこられたのであり、武劇に専念する余裕はなかったと述懐しておられる。先生はすでに齢七十、若いとはいえないので、先生のこれからの活動を扶け、アイディアを提供し、財政的な援助をしてくれる人たちの存在が欠かせない。

本来なら国のしかるべき機関が真っ先に援助の手を差し伸べるべきなのであるが、歌舞伎、浄瑠璃、能あるいは相撲、柔道、剣道、空手などのメジャー

武道には莫大な援助を行っても、剣術を骨子とする武劇には一銭の金も出さないというお粗末振りである。

小説を読む日本人の約半数は、歴史あるいは時代小説を読んでいるという統計が以前新聞に発表されたことがあるが、剣術は依然として日本人の心の故郷と言い切ってもよいであろう。

第二次大戦後占領軍によって剣道（剣術）が禁止された期間が10年ほど続いた。刀を振るうのは日本人の野蛮な行為の名残であり悪であるという思想が戦後民主主義を支配した。占領が解かれた後にも、政治・教育界の指導者たちは占領軍の思想を踏襲し、日本人にはとても馴染みの深い塚原ト伝、宮本武蔵、上泉伊勢守といった剣の名人達人の名は、教科書にその名を記載することを拒否した。

彼らは戦争や果し合いなどを通じて人を何人も殺したことは事実であろうが、彼らが一剣に託して守り伝えようとしたのは、武名だけではなく、精神の在り方であったと知れるのである。

この問題はとても奥が深いのでこれ以上論じることは題の趣旨から逸脱するので、いつか徹底して論じることにしたい。

さて本題である。

この公演は二部構成となっており、第一部は現代劇、第二部が武のオンパレ

ードとなっている。

第一部は、かつて繁盛していた林道場が幹部の揉め事をきっかけに閉鎖され、数年後に少人数の弟子とともに小道場を開いたが、またしてもそこに地元のヤクザたちが乗り込んできてちょっかいをかけるという設定から始まる。 林師範は武劇のアメリカ公演の折、同道していた奥さんをマフイアのメンバーに拉致され、行方が分からないままに帰国、衝心の日々を送るうちに毎日酒ばかり呑んでいていまや酔いどれ武道家のていたらくである。

だが武道の腕は衰えておらず、刃物を持って襲ってくるヤクザたちを、たちまちのうちに叩きのめしてしまう。そこで披露されるのが合気道と大東流柔術を取り入れた林流護身術だ。

その間ぜひ林道場に入門したいという女性を巡って一波乱があるのだが、筋を追うことは控えておこう。結局その女性は入門を許され、間もなく開かれる道場主催の武術大会に向けて他の門弟とともに稽古に励む。

その武術大会が第二部の内容である。林先生の試斬演武や琉球古武術の演武などがあり、様々な道具を使ってのくのー（女忍者）の技が披露される。

そこで使われる武器は、刀、薙刀、槍、棒といった基本的なものから始まって、ヌンチャク、トンファー、釵（さい）、鎌、手甲（てっこう）、鉄菱（てつびし）など、実に多彩であり興味を惹かれるものばかりなのである。

くのーに襲い掛かる武芸者集団は迫真的な殺陣を見せ、忍者は先に紹介した小武器を用いて巧みに敵を斃しすばやく姿を消してしまう。動きには無駄と淀みがなく長い期間にわたる鍛錬が忍ばれる。

最後は林流護身術の手解きで締めるという考え抜かれた内容であった。大いに楽しむことの出来た三時間に及ぶ公演であったが、敢えていえば、全体を

一つの時代劇にまとめて筋の中で個々の技を紹介して欲しかった、と思うのは私だけであろうか。

会場へは文武両道塾の塾生数人を伴っていたが、ジパング文化普及会会長である書道家の山後墨仙氏及び日本空手同連盟和同流武心会最高師範の田浦孝冨先生も弟子の方々を連れて観劇に見えていたので、合流して一杯やることにした。場所はヤキトリ専門店の伊勢や。私が若い頃一人でよく通った店である。

観劇の印象や武道の話で盛り上がりひっきりなしに飲物が運ばれてくる。夕

方までにはたっぷり時間があり、十分にお互いの交流を深めることが出来たことは幸いであった。

クラシックピアノとの詩即興朗唱

2009年8月2日

去る7月25日、荻窪駅南口から歩いて15分位の所にある「with遊」という喫茶店でいわくのあるピアノコンサートが開かれた。

もと風呂屋のあった場所とのことで、奥に40人ほどの客を収容できる小ホールがあり、小型のグランドピアノが置いてある。

現在喫茶店では「ジパング文化普及会」のメンバーである三浦忠夫さんの作品展示が行われている(37月30日終了)。三浦さんの作品は絵画あり、彫刻あり、紙粘土で作った人形ありで、大変楽しい作品群である。

ユニークなのはボトルキャップと名付けられた作品で、動物や人間の頭部を紙粘土で象り色彩を施したものである。中が空洞になっていて、アルコール類のボトルにキャップの上からすっぽりと被せることが出来るようになっている。

現在飲み屋さんにじわりじわり広がっているそうな。

ここに関家まきというピアニストがいる。ロシア人の音楽家と結婚していてロシアに住んでおり、一子を設けた余波にいま日本に里帰りをしている。

私は、柴田敏也さんというコンピューターを使用した作曲家(ジパング日本文化普及会のメンバー)に、モスクワ交響楽団と共演する彼女のDVDをみせてもらったが、手の動きの目にも止まらぬ早さに驚嘆した。柴田氏にいわせると天才とのことである。

彼女は日本の音楽大学を卒業した後渡英し、ピアノの修行に励む傍ら数々の国際コンクールに優勝する実績を持ち、また世界の著名な交響楽団と共演するという実力の持ち主である。

柴田氏はあることから彼女と知り合い連絡を取り合っていたとのことである。まだ31歳という若さであるが、ロシア人の作曲家と結婚し今はモスクワに住んで昨年見事な男の子を出産した。その子を連れての里帰りであり、子供を出産してからはピアノに手を触れたことはほとんどないとのこと、もったいない話である。

その彼女が里帰りをしているというので、柴田氏はどこか適当な場所を探し

て仲間内でも彼女の生のピアノに触れてもらいたいと切望していたところ、たまたま三浦さんが作品を展示している喫茶店にグランドピアノがあるという話を聞き、飛び付いたというわけである。

そういう背景があって関家さんのミニコンサートが実現した。彼女のご両親、おじいちゃんおばあちゃんも列席しており、おじいちゃんは99歳、おばあちゃんは92歳とのこと。今年結婚70周年を迎えるとのお話で、お二人が並んで座っているだけで絵になりパワーをもらえる。

さて、私は連絡を受けていたので出席するつもりでいたが、前夜刀道の仲間と明け方まで酒を飲み交わし、へべれけに酔い痴れて家に帰り倒れこんだま

ま昼まで寝込んでいたそうな。あちこちで転んだとみえて喪服が泥だらけになっていた（刀道連盟幹部の葬儀の帰り）。

午後二時開演ということであったが、目を覚ましてみるとすでにその時間を過ぎている。二日酔いで頭ががんがん鳴っていたが、私の住んでいるところから荻窪まではそう遠い距離ではない。演奏の終わりを掠めることが出来るかもしれないと淡い期待を抱き、急いで支度をしてバスで荻窪駅に向かった。

地図にある「with遊」はすぐに分かったが、すでに開演から一時間ほど過ぎている。

会場に飛び込んでみると、案の定演奏は終わり出席者たちは円卓状の机の回りに座り、飲物を前において自己紹介が続いていた。私は「やんごとなき事情がありまして」と遅参を詫び、生ビールを注文して順番が来るのを待った。

二日酔いで頭ががんがんしているのに又ビールを飲もうとする自分のアル中度に感心しまた絶望した次第である。

私の番が来て立ち上がり、自分は刀道という古武道としての実戦剣法を研究しまた教えているということ、ミュージシャンと組んで詩の即興朗唱ということもやっているといったことを一言述べた瞬間、横に座っていた仕掛け人の柴田さんが、

「後ほどそれをやっていただきますから、話はその辺で」

と私の次の言葉を遮ってしまった。

それ以上話す積もりはなかったにしても、こちらの同意を得ないままに詩をやってもらいますと断言されたのである。正直のところ、まず三浦さんの作品展を観て、それからクラシック演奏を聴くという段取りで来ており、詩朗唱をやるなんてことはこれっぽっちもなかったので多少動揺した。

しかしながら、そのことによって関家さんの演奏を聴くことが出来るわけであり、飛び入りは止む終えないことであったのである。

自己紹介が続いている間、ビールをすすりながらテーマは何にしようかと必死に考えていた。ロシア、ドストエフスキー、文学、音楽、人間・・・と連想ゲームのように言葉をイメージしているうちに、ふと言霊という言葉が脳髄を過ぎった。

ストーンと胸に落ちるものがあり、テーマがそれで決まった。

自己紹介が終わりすぐにピアノとの競演を促された。直前にテーマが定まったことで気持ちの動揺はない。ピアノの前に座った彼女に会釈し、音の先行を促す。

静かな流れるような即興のメロディが言葉を誘う。

「広大なロシアの大地を思い浮かべるとき、脳裏にすぐに思い浮かんでくるのは、ドストエフスキー、トルストイ、アルツィバーシャエフ、言霊の達人たちである。

翻訳で読んだその人たちの言霊には感動という霊気が漂っており、人間の奥深い情感を揺り動かせる。

翻訳で読むと作家の心情は伝わらないという人がいるけれど、決してそんなことはない、決して！

感動という形で伝わってくる作家の言霊は普遍的なものであり、アメリカ人が英語で、フランス人がフランス語で、中国人が中国語で、日本人が日本語で読んだときに伝わるものは同質なものである。

個々の国の言語を超えた言霊が人間の脳髄の闇を一筋貫いている。

言葉だけではない。

音楽も、絵画も感動として情感される背後には言霊の存在がある。それは人間全てに共有されるものだ。

人間が人間であるところのそのものこそが人間の連帯をもたらしている。

ところが人間は、宗教、民族皮膚の色の違いで差別し合い、憎しみ合い、殺し合う。

おお、人間よ、あなた方が共通して持つ感動の言霊はどこへ行ったのか？

何を拠り所に生きようというのか？

青く澄みわたったバイカル湖に激した魂が沈下してゆく。

長くゆっくりとした時間を掛けて冷たい湖の底に沈んで激した魂を冷ますんだ。

そうしてもう一度人間の使命について考えるのだ。

熱した私の脳髄を涼しくも高揚した音が掛け抜けて行く。

私はその音を聴きながら生きていることの素晴らしさを今感じている。」

音はときに軽やかに流れ、ときに大凧が空に舞い上がるように高みに飛翔してゆく。

私は音に触発されて言葉とイメージをつむぎだし、音は言葉の魂に触れて音域を変化させる。初めて出合い、練習も打ち合わせもなくいきなり始められたピアノと言葉の即興コラボレーションは一つの創造的空間を生み出したたかにみえた。

終わったとき一瞬の沈黙の後激しい拍手が起こった。

感歎の声が飛び交う。これまで数限りなく行ってきた私の詩即興朗唱の最良の出来の一つになったような気がした。むろん二日酔いの兆候の全てが吹っ飛んでいた。

私の頭の中で何が起こったのか？

聴衆の一人に私が主催する文武両道塾の塾生が一人いて、共に帰路を辿りながら雑談をするうち彼が言うには、「朗唱の上出来の最大の原因は、二日酔いで頭に酒精が残っていたせいなのかも知れませんね」

だって。

ハリウッド映画ポスターオリジナル

2009年8月7日

私たち「ジパング文化普及会」のメンバー四人は、午前中の到着を目指して山梨に向かった。

軽乗用車に大の男四人が乗っかっての旅である。

持ち込んだアイスボックスには缶ビールがギンギンに冷やされていて、道中の饒舌には事欠かない。

旅の目的は、同県の北杜市でとんかつ屋を営む池葉孝氏を訪問するためである。名物のとんかつを食べに行くのではない。氏が保存するハリウッド映画

のオリジナルポスターを拝見するためである。

その収集枚数は数千枚に及ぶと聴く。

情報をもたらしてくれたのは、リヨン剣術紀行のプロデュースを担当した長野の深沢夫妻である。映画研究家（俗に映キチ）の三浦忠夫氏が関心を示さないわけがない。自分一人で出かけるのは余りにももったいないという理由で、仲間の山後、鶴見、佐土原の三人が同行することになったというわけなのである。

東京を出るときは曇りであった天候は、西上するに連れて雨模様になり沈鬱な状況となったが、車中は適度にアルコールが回った三人の弾む会話で湿り気なしである。

あらかじめ知らされていたにも関わらず目的の場所に中々到着できず、一時間も遅れてしまった。それでも根気よく夫妻は待ち受けてくれており、無事山梨県北杜市大泉町の「とんかつ二葉」で合流。それぞれビールを飲みながら美味しいとんかつ定食をいただき、いよいよご主人

の二葉氏登場。

大きな筒状のケースから全紙大のポスターを取り出して、次々に広げて見せてくれた。それらは全てアメリカでロードショー上映されたときに張り出されたオリジナルである。そのほとんどは日本で上映されているが、ポスターは日本版である。それらのポスターの収集も無論貴重であるが、英語のオリジナル版は日本人の我々が目にする機会は全くといってよいほど無く、大変物珍しく貴重なものに見えた。

かつて観たことのある映画のオリジナルポスターがご主人の手で広げられる度に、私たちは感歎の声を上げ、瞬時にその映画の世界に没入し、感涙にむせぶ。三浦さんなどは本当に涙を流して喜んでいた。

そうした貴重なオリジナルポスターを丹念に収集したのは実は、その場に居られる「とんかつ二葉」のご主人池葉孝さんではなくその弟さんとのことであった。弟さんは50歳代の若さでガンで亡くなったとのことであり、死に際してお兄さんの孝さんに、

「自分が全生活をかけて収集したポスターを託すからどうか大切に保管してもらいたい。しかし、食うのに困ったら切り売りすれば良い。一生食うに困らない

だけの量と価値がある」

と言ったという。

弟さんは米国のポスター販売会社と契約していて、定期的に購入していたらしいという。数千枚と聞いたが、ご主人の話ではおそらく一万枚に達するのではないかとのことである。私たちがその場で見せてもらったのは数十枚に過ぎないが、我々全員が全貌を垣間見たい欲求にかられたことはいうまでもない。

その全てを拝見するためにはおそらく数日を要するであろう。

保管している場所もあちこちで自分でもまだ整理できていないとおっしゃっていた。

美術館とか博物館に寄贈ないしは売却する方法もある。そうすれば散逸しないですむはずであるが、自分が死ぬまで手放したくないという気概が池葉氏に感じられた。

出来れば、とんかつ屋の横の敷地に弟さんの名を冠した私設展示館を作ってあげれば、全国的な名所となること間違いなし、と帰りの車中で語り合ったものであった。

それでも、かなりの数のポスターが都内でも巡回展示されたことがあるとのことであり、近所のラジオ局の館内でも展示されている現場を拝見することが出来た。

オリジナルはすべて向こうの有名デザイナーが手掛けており、それ自体がまさに芸術作品の趣を呈している。映画の内容と関わりなく観ているだけで楽しく感動的なのである。

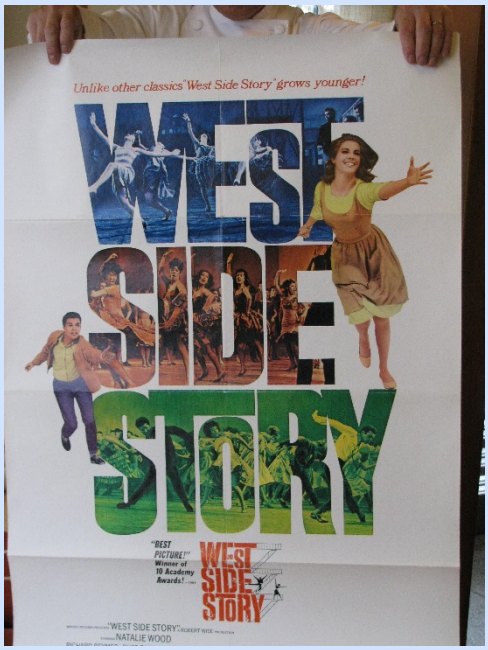
未知の世界を垣間見た心地がして東京へ帰ってもしばらく興奮が覚めることがなかった。

BUTCH & THE KID ARE BACK!
Just for the fun of it!
Probably the most entertaining Western ever made!
PAUL NEWMAN · ROBERT REDFORD
KATHARINE ROSS
"BUTCH CASSIDY AND THE SUNDANCE KID"
A George Roy Hill-Paul Monash Production
Co-Starring STROTHER MARTIN • JEFF COREY • HENRY JONES • Executive Producer PAUL MONASH
Produced by JOHN FOREMAN • Directed by GEORGE ROY HILL • Written by WILLIAM GOLDMAN
A NEWMAN-FOREMAN Presentation • Panavision®

THE WORLD'S MOST HONORED MOTION PICTURE!
WINNER OF
11 ACADEMY AWARDS
including
"BEST PICTURE"!
METRO-GOLDWYN-MAYER
presents
BEN-HUR
DIRECTED BY
WILLIAM WYLER
STARRING
CHARLTON HESTON · JACK HAWKINS
HAYA HARAREET · STEPHEN BOYD
HUGH GRIFFITH · MARTHA SCOTT · CATHY O'DONNELL · SAM JAFFE
WRITTEN FOR THE SCREEN BY
KARL TUNBERG · SAM ZIMBALIST
WIDE SCREEN
STEREOPHONIC SOUND • METROCOLOR®

"GONE WITH THE WIND"
Winner of Ten Academy Awards
CLARK GABLE
VIVIEN LEIGH
LESLIE HOWARD OLIVIA de HAVILLAND
A SELZNICK INTERNATIONAL PICTURE · VICTOR FLEMING · METRO-GOLDWYN-MAYER INC.
STEREOPHONIC SOUND METROCOLOR

adventure and exploratio
Space Station One, your first step in an Odyssey that will take you to the Moon, the planets and the distant stars.
STANLEY KUBRICK'S
2001: a space odyssey


Unlike other classics "West Side Story" grows younger!
WEST
SIDE
STORY
"BEST PICTURE!" Winner of 10 Academy Awards!
WEST SIDE STORY
"WEST SIDE STORY"
NATALIE WOOD

京ことば源氏物語　全五十四帖連続語り

2009年8月12日

先週の八日(土)、明大前の小劇場「キッド・アイラック・アート・ホール」で壮大な企画がスタートした。

源氏物語全五十四帖を連続して語り続けようとする会の発足である。原文での源氏を語る会はあちこちの講座などでまま見かけるが、一人の女性が京ことば訳で語り通すという話は前代未聞である。隔月の公演で全巻を語り終えるのに、十年以上かかるという気が遠くなるような企画なのである。

それを始めたのはプロの俳優であり声優である山下智子さん。

彼女は今舞台からは遠ざかっているが、NHKラジオ第一放送で毎週月曜日九時半から「歌謡ドラマ」という30分番組がある。有名な歌謡曲を一曲取り上げ、その世界をドラマに仕立て、テーマとなった歌謡曲を要所に流しながら一話完結の人情哀話を作り上げる。

そこで彼女は毎回主役として出演している。ラジオを良く聴く方は一回くらいは聴いたこともあるはずだ。透明な良く通る声で、恋に命を掛けて生きる様々なタイプの女性を見事に演じきっている。その声を聴くだけで役の女性の姿が髣髴としてまぶたに浮かび、たちまちのうちにドラマの世界に溶け込んでゆくことができる。

美声の持ち主だけでなく、写真にあるように類稀な美貌の持ち主でもある。天は二物を与えたのである。

そのような人から会の案内状が届いたのであるから、どんな用事や仕事をキャンセルしてでも出かけようとするのが男というものである。しかも隔月で十年という途方も無い年月を要する企画そのものに、聴衆として付き合ってみたいという執念を掻き立てる魔力のようなものを感じた。

何はともあれ、チラシに記された彼女の言葉を記してみよう。

「『京ことば源氏物語』は今から百年ほど前の京都の言葉で訳されています。

現代からみると雲の上のような格調高い王朝絵巻ですが、京ことばは源氏物語では一人の女房の視点から見た宮中の出来事のあれこれが、あたかもここで話しているように語られ、生き生きとした平安の世の人間模様が浮かび上がります。

『桐壺』から『夢の浮き橋』までの全五十四帖を京ことばで語ることによって、源氏物語を生んだ京都の風土が醸し出す、もののあわれの世界を感じて頂けることと思います。」

智子さんは京都生まれであり、京ことばの源氏朗読にはうってつけの人でもある。

七、八年ほど前私はある女性詩人のお家で彼女を紹介された。そのとき、彼女は越後地方に伝わる古舞いを披露して下さった。素人の域を超えた見事な踊りで、彼女の抑制されたうつむき加減の表情と共に濃密な印象を私の胸に刻みつけた。

それ以降詩の朗読会などで何度かお会いした程度のお付き合いである。最近では源氏物語の京ことばの語りに比重を置いて動いているとの便りをいただき、ぜひ一度拝聴したいと思っていた矢先のことであるから、機会到来に欣喜雀躍した次第である。

前夜私は源氏物語千年紀にちなんだ和歌を一首毛筆で書き上げ、翌日黒の

作務衣を着て歌を筒に丸めてバッグに投げ込み、少し早目に明大前に出掛けた。

駅の近くの花屋で洋蘭を中心にした簡素な花束を見繕ってもらい、その中に丸めた和紙を差し込んでホールに向かった。開場前であったが会場で準備中の彼女に会いとりあえず花束を渡しておいた。しばらくお会いしていなかったが、はっとするような美しさにはいささかの陰りもない。

開場待ちに地下の喫茶店でビールを一本飲んで受付のある地上に出てみると、すでに多数の客が列を作っていた。ほとんどが女性で50席の客席はたちまちの内に埋まってしまった。予約制であったため入りきれない客が溢れるような混乱はなかったようだ。

舞台背景は衛門掛けに華麗な内掛けが一枚通されてあるだけで、あとは椅子とマイクのみという簡素な仕掛けである。

時間と共にまずはこの公演のきっかけを作ってくれたという絵本作家のエムナマエ氏の挨拶があり、続いてご本人の挨拶、京ことば訳の中村和子氏（故人）についての思い出などが語られ、ついで第一帖「桐壺」の粗筋について説

明があり、いよいよ本文の朗読である。

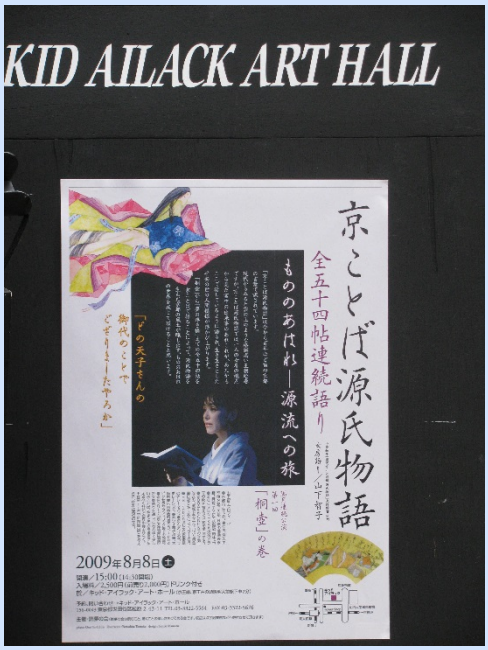
「どの天子さんの御代のことでござりましたやろか・・・」

という言葉で物語は始まる。奥行きのある透明な声、絶妙な間とともに、ゆったりとした京ことばが千年の時の間境を一挙に縮めてしまう。客席はしゅくとして静まり返り、しわぶき一つ聞こえてこない。

異空間の出現の瞬間であるが、王朝絵巻の世界が実に身近に親しみをもって感じられ、源氏物語の中に流れる日本人の血が、千年のときを隔ててなお脈々と繋がっている不思議な連帯感を感得することが出来た。

語りが終わった時、未だなお夢幻の世界に浮遊している自分を見出して一瞬立ちくらみしたほどである。

出口で客を見送る彼女と軽く握手をして、まだ夕暮れには間がある現実の世界に飛び出して行った。


KID AILACK ART HALL
京ことば源氏物語
全五十四帖連続語り
もののあはれ―源流への旅
「桐壺」の巻
2009年8月8日

白樺湖畔の宿での演武

2009年9月6日

その日(8月21日)は、朝早くから日野市にある東京至誠館道場に赴いて、水に漬けた巻き藁を引き上げて梱包することから始めなければならなかった。

この日の夜長野県の白樺湖観光ホテル景陽で刀道の試斬演武を行うためである。もう一つの演目は山後墨仙さんの書フォーマンス。刀道の私の相棒はフランス人のジルダ・シェルエル。

こう書くと、私のブログを読んで下さっている方は、あのメンバーではないかと思い出していただけるはずである。　そう、フランスリヨン市で一緒の面々なのである。

従って、白樺湖のホテルと我々を結び付けてくれたのも、そのときのプロデューサーであった長野県塩尻市在住の深澤夫妻ということになる。今回は『ジパング文化普及会』の一行事として企画された。

さて、あらかじめ連絡しておいたジルダはすでに道場に来ていて、二人で水

から引き上げた十本の巻藁の梱包を済ませクルマの到着を待つ。

程なくしてワゴンを運転する鶴見さんが到着。後は電車でやってくる山後氏を待つのみ。

到着まで少しばかり時間があるので、道場の近くの蕎麦屋で休憩することになった。ジルダと鶴見さんは盛り蕎麦を食べ、私はビールを注文する。

ビールを二本飲んだところで山後氏到着のメールあり。蕎麦屋から駅まではすぐそばであるが、鶴見さんがクルマで迎えに行く。

ところがいくら経っても帰って来ないのでやきもきしていると、バッテリーが上がって車が始動しないとの連絡が入った。

これは大変とばかり道場にとって返し、タクシー会社（道場の経営母体である）の知人に電源供給のお願いに上がる。タクシー会社と道場が一つ所にあることがこれほど有り難いと思ったことはない。

何はともあれ出発進行。

うだるように暑い夏日であったが、クーラーを使うと電源が落ちエンストしてしまうということで、窓を開け放して走るのであるが、車内の蒸し暑さがさして軽減されるというわけのものでもない。

走っているうちに充電されるだろうというと甘い見通しを立て、窓を閉めてクーラーを入れると途端に電圧が下がり慌ててクーラーを切って窓を全開する、ということの繰り返しで一路長野へ。それでも不安が残るということで、念のために途中で電源供給を受けるためのコードを購入。

一時間以上も高速を走り続けて電圧も上がりもう大丈夫だろうと油断したのがいけなかった。

クーラーをつけて快適な走行を続けることが出来たのは東京を出て一時間

強。休憩所を出ようとしたときにエンジンがかからない。

まさかと思いつつ念のために買っておいたコードが見事に役に立ってくれたのである！同じ列に停車してまさに出発しようとしていた乗用車にお願いして電気を分けてもらう。

全員「フウーッ」と一つ溜息をついて酷暑のワゴン車に乗り込んで出発。その後はエンジンストップのトラブルは無く、予定より約一時間遅れて白樺湖に到着した。

（翌朝の部屋から覗いた白樺湖風景）

ホテルにはジルダの奥さんの富士子さんとお母さんがすでに到着していて、ロビーで休憩していた。

支配人の案内でとりあえず荷物を部屋へ運び込む。

私とジルダはリヨンでやったことをなぞる動作が多いとはいえ、二人で試斬をやるのは初めてであり、また解説を行いながらの演武ということもあって、事前打ち合わせと稽古は欠かせない。

文武両道塾の道場稽古では(他にも教わる人たちがいるので)この日のため

の稽古は全くといってよいほどしていなかったのである。

風光明媚な環境を楽しむ余裕などなく、稽古のできる場所に案内してもらう。

案内してもらった場所は、小さなステージが設けられた十畳ほどの畳部屋である。やむなく真新しい畳の上にブルーシートを敷いて、そこに試斬台を二本立て濡れた巻き藁を芯に突き刺し、私が考えてきた試斬をジルダに指示しながら行ってみる。

なんと彼は袈裟、斬り上げはもとより、水平斬りまで見事にこなして見せた。驚くというほかない。

彼は、実際に巻き藁を斬るのはこの日で三回目であり、本部道場の稽古では踏み込んでの袈裟が出来るかどうかの水準でしかない。形が崩れることなく水平斬りまでやってのけたのであるから、事前の型稽古がいかに大切であるかの証明ともなったのである。

部屋の隅々にまで飛び散った藁クズを掃き集め、ブルーシートをたたみ本番に備える。

夜には台湾から数十名の泊り客が到着するというので、開始の時間が遅くなり、食事も事前に済ませることになった。

実は、食事は演武の後でゆっくりいただく積もりでいたので、途中で弁当やおにぎりなど買い込み十分に腹を満たしていた。それから二時間もしない内に食事ということになったから、次々に出されてくるご馳走にメンバーの全員が半分も箸を付けられない。その後に演武が控えているので酒も飲めない（とはいえビールを二本注文したのであるが）。

仕方なしに残り物を折詰にしてもらい、演武後の宴会のつまみにすることにした。

八時演目開始。

トップバッターは書フォーマンス。ホテル副支配人の紹介の後書フォーマンス創始者山後墨仙氏が登場。

気負いのない手馴れた動作で太筆を振るい独特の書体で次々に畳一畳大の書を書き上げてゆく。書きあがった書を背後の台に立てかける。

「白　樺　湖　碧　遊」

（この写真は翌朝写したもの）

と読める。自然に溶け込むようなゆとりのある見事な書体である。

次は私たちの出番。構成を二つに絞る。

一つは、「刀道　文武量合塾」実戦刀法四つの型の一を披露。

まず二人で型を演じてみせ、それが敵とどういう関わり方をするのかを解説を交えながらなぞってゆく。突きにしてもどこを狙って突いているのか、斬り上げは相手のどの部分を狙っているのか、解説することによって観客に剣技の真実性と具体性を与えることが出来る。そうして最後に同じ型で実際に巻き藁を斬ってみせるのである。

そうして次に木刀を用いて相対組太刀を行う。

これは攻撃と防御の実戦形式をなぞるものである。カンカンカンと木刀同士が噛み合って律動的な音を立て、剣術の醍醐味を伝えることが出来る。観客は約50名。これは大いに受けた。

最後に一本だけ残って巻き藁を使い、左右の袈裟、斬り上げ、右左の水平斬りを披露して終了。前の方の客は立ち去り難い思いで、両断された巻き藁を手にとって眺めるなどしていた。

わずかなミスはあったが二人の動作が良く同期していて成功裏に終了。終了後、ジパング文化普及会の事務局長でもある鶴見さんが、我々の活動状況を記したパンフを客席に配って歩いた。

露天風呂で汗を流し、山後、鶴見、私の三人の宴会が部屋で始まる。

ジルダは富士子夫人と同室で、お母さんは一人で別室でくつろいでいる様子である。

鶴見さんは長時間のクルマの運転で疲れたのか早々にダウン。彼のいびきをバックグラウンドミュージックにして、山後氏と明け方まで話しこむ。

翌朝は九時出発。ジルダは家族と行動を共にするとのことでホテルで別れ、我々三人だけで長野市に向かう。

山後氏がまだ善光寺へ行ったことがないというのでまずは善光寺詣でである。

その車中でもクーラーに気を使う。運転席と助手席に座る山後氏はバッテリーが上がるのを警戒してクーラーを切っていたが、後ろに座る私は操作スイッチが脇の席にあることをこれ幸いに、クーラーを付けっ放し。

前の二人が

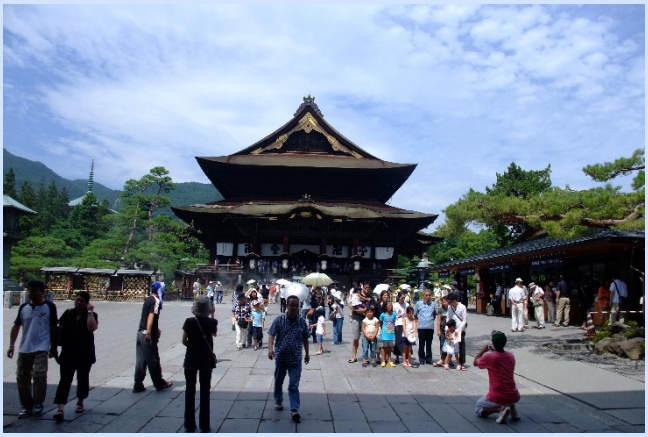
「おかしいな、スイッチを切っているのに電圧が下がっている・・・」

としきりに不思議がるのがおかしくて仕方がない。

クルマは人から借りたものであるので、運転の鶴見さんは後部座席用に後ろにスイッチが付いていることを知らないようだ。

一人だけ涼しい思いをするのが心苦しくなったので、ついに後ろでクーラーを入れていることを告白した。二人の大笑いで一件落着。

車中では、昨日スーパーで買ったワインを飲み続けていた。ビールを飲むとトイレが近くなる。



一時間強で善光寺到着。内陣に入り暗黒の胎内巡りを体験。私は善光寺は三回目であるが、胎内巡りをしたのは始めてである。

ついでに宝物殿を参観。何百年前の管主の書や寺の設計図などが展示してあった。武田信玄と上杉謙信の立派な位牌が並べて展示されているのには度肝を抜かれた。

昼食を参道にある蕎麦屋でとり、土産物屋で蕎麦茶などを買ってクルマへ戻る。

鶴見さんが小布施の北斎美術館へ案内してくれるというので、そちらへ向かう。

日本美術界の巨匠葛飾北斎は晩年の一時期小布施で暮らしたことがあるという。土地の豪農商であり幕末の志士でもあった高井鴻山（こうざん）の屋敷に別室の庵を与えられ、そこで暮らしたとのこと。

いまだ残っている庵を見たが、六畳一間の簡素な庵であるが、食事を別に与えられ絵を描くスペースは十分であり、何の不自由もなく創作に没頭できたと思われる。

（小布施北斎館）

高井鴻山記念館案内図と順路
高井鴻山記念館
Information for Takai Kozan Memorial Museum

（高井鴻山本宅から籾蔵を望む　）

北斎館のコレクションは見事の一語に尽き、観ていて飽くことを知らなかった。

暮色が漂い始める頃首都へ通じる高速に出る。

談合坂辺りで渋滞に巻き込まれたが、九時過ぎ高井戸駅に到着。

山後さんはこれから重いリュックを背負って所沢まで帰らなければならない。

私はまさに地元の駅であるが、真剣二振り、居合刀、木刀、小刀各一本を入れた刀袋が人を背負うように重く感じられた。

直感のダンディズム』 有賀真澄個展

<< 作成日時 : 2009/09/27 21:31 >>

2009年9月27日

正直言って驚いた。

真澄さんは俳人であり画家であるが、ほぼ一年に一回開かれる個展には大体において出向いているものの、実は昨年は旅行か何かの重なりがあって、出向くことは出来なかったのである。

それまでの印象では絵画作品が主であり、俳句と組み合わされており、半獣半人を思わせる独特の作風に他の追従を許さないオリジナリティを感じさせ、それなりに楽しんでいた。

しかし今回は余裕のある楽しみが＜驚愕＞に変わったのである。

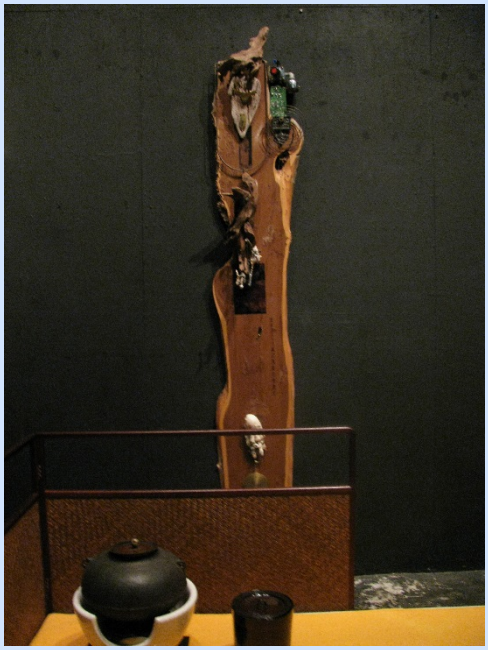
シュールレアリスムの創始者アンドレ・ブルトンは「芸術(詩)は驚愕でなければならない」といったが、驚愕を伴う芸術作品には滅多にお目にかかれない。

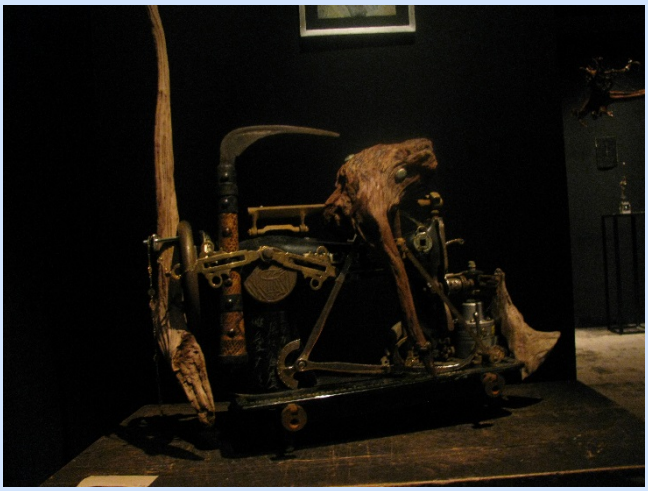
私は会場に足を踏み入れて、戦慄とも驚きともいえない感情に襲われた。

これまでの印象とがらりと様子が違って立体作品が大半を占めていたというばかりではなく、いやそういうことではなく、立体造形作品の完成度に慄いたのである。

磨きぬかれた流木と小さな機械や小物の部品がほぼ完璧な形で組み合わされ、違和感が無く溶け合っている。

むろんこの種の造形はあちこちでお目にかかるものである。自然の草木と現代科学の落とし子の組み合わせはいまや主流といってよいほどにあちこちで見られるが、その中でも小金井市在住の彦坂和夫氏の作品は出色のものであり、自然と人工物の融合というよりは、現代文明による自然破壊がテーマとして読み取れ、作品自体が一つの批評となっている。





ところが、有賀真澄氏の作品は、批評や思想を一切退け、素材の美しさと嗜好のみが優雅に配置され、「直感のダンディズム」としかいいようのない魅力ある造形を形作っているのである。それが何を表現しているか、何を主張しているか、など一切考える必要はなく、またそういう複雑な思考の手続きをあざ笑うかのごとく、作品化されたモノとしてそこにあるのみなのだ。

細部をよく眺めると、実に丹念にまた悦楽感をもって造形された手順が克明にうかがわれ、観るものの愉悦感と至福感を刺激する。どこにも曖昧さと手抜きが感じられない。一部の隙もなく完璧に造形が行われている。

これぞ芸術の至福と言わずして何というべきか。

理由も、哲学も、批評も何も必要はない。作家の直感を完璧に表現できる才能と技術、これが芸術作品の真骨頂といえるであろう。

真澄さんは日常でもダンディであり優雅である。日常と作品が一致する人は稀であり、特に作家や詩人は作品と日常生活の落差が激しく見られる場合が多い。むろんそれはそれでいいのである。

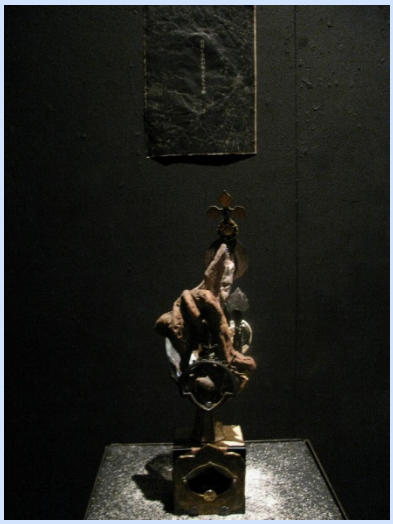
だが日常生活のダンディズムを作品に同化あるいは昇華させるという技は、真の芸術家の魂を持つ人のみに備わった天性なのである。現代はそういった人が極めて稀であり、彼は天性の名に値する一人であるといえよう。

また、彼は会場設定に一工夫を凝らしており、まるで上映中の映画館入り込んだように会場の照明を暗くしている。むろん作品の個々の全体像が見える程度の照明は施されているが、細部を見るためには備え付けのペンライトでよく観るように仕掛けされている。

この構想は作品群によく呼応したものでありまさに必然を感じさせるほどに雰囲気を醸し出している。事前に構想したものとは思われず、全ての作品を制作し終えた後、突然のひらめきが照明のアイディアを生んだものであろう。

また、真澄さんのもう一つの顔である俳句が作品の随所にちりばめられて観る者の想像力をさらに遠くへ誘う。その中の一句を紹介しておこう。

「夏はカミソリ風は角度を唯愛す」



刀道連盟昇段審査(平成 21 年度秋季)

<< 作成日時 : 2009/10/17 14:14 >>

2009 年 10 月 17 日

去る 11 日、全日本刀道連盟秋季昇段審査が日野の本部道場と朝霞の武劇館の二箇所で同時に行われた。

武劇館は林主席師範の道場であり、そこでは四段と初段の各一人が審査を受け、本部道場では車副主席師範審査長のもとで四人が初段を受けた。

その四人は小生が塾長を務める文武両道塾の塾生であり、教え始めてからまだ二年少々の新人ばかりである。 何しろ塾を開設したのが三年前であるから、この人たちは新人とはいえほぼ最初期の入門者なのである。道場は文京区のスポーツセンター剣道場を借りて使用しており、稽古は毎週水曜日午後六時半から始める。

刀道は巻き藁を斬って刃筋を確かめる流派であるが、そこでは試斬が出来ないため、木刀と居合刀を用いて基本の斬り方、素振り、組太刀を中心に教授する。

日野の本部道場では入門したその日から道場で貸し出す刀で試斬を行う。それが従来の刀道のやり方であり、まず刀の扱いに慣れるということが重視される。しかし斬れる斬れないに意識が集中して基本形がおろそかになり勝ちであったことは否めない。

ところが文武両道塾に入門してきた人たちは、初めから斬れる斬れないという意志と感覚がないから、木刀による試斬の基本形に集中できるという利点がある。

しかも徹底して細かいところを補正しながら指導するので、試斬を行うときには体

で覚えこんだ基本形そのままに刀を振れば、理想の角度で藁を両断できるはずである。

昇段審査半年後を見据えて、塾生たちに刀を買うことを奨めた。求めに応じて二人が即座に打ち下ろしの刀を手に入れた。

そうして四人の塾生を引き連れて本部道場に赴いたのは夏の真っ盛りの七月のことである。

正直なところ、私は内心忸怩たるものがあった。教えたとおり彼らが刀を振って斬れなかったらどうしょうという思いで緊張していたのである。道場には副主席師範に指導を受ける門下生が毎週やってきて試斬を行っているわけであり、当然先生をはじめ皆の注目の的となる。

簡単な体操と素振りの後試斬を行わせてみて、私の杞憂は吹き飛んでしまった。その日試斬に参加しなかった一人を除いて、見事な角度で巻き藁を両断できたばかりか、三段から審査対象となる逆袈裟斬り(斬り上げ)まで見事にやってのけたのである。

奥の方で稽古している人たちの驚愕の表情がなんとも印象的であった。

私は自分の指導方法が間違っていなかったことに安堵し、忠実に指導に従って稽古に励んできた弟子たちに誇りすら抱いた次第である。

試斬の稽古は月一回に限っていたので、審査を迎える日まで計四回の試斬しか行っていない。体転をしながらの試斬には当初てこずっていたものの、木刀と居合刀で集中的に体転試斬の型を繰り返し稽古し、見事この日受験した四人全てが合格することが出来た。

むろん幾つかの課題はある。だが、このまま稽古に励めば次の段階のクリアは

そう難しいことではない。むしろ気を引き締めなければならないのは私自身の方なのである。

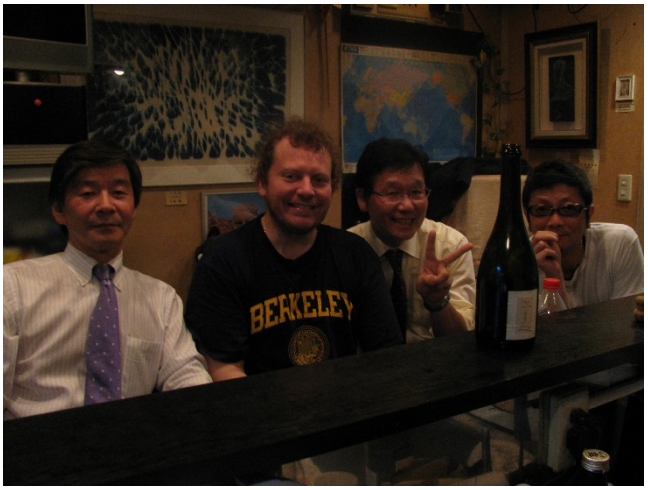
（審査の前の体操）

（左から前田師範、車副首席師範、佐土原師範）

（初段の型の試斬を行う木下氏）

（車審査長による講評）

（画面左から、木下、後藤、ジルダ、高梨、中央佐土原）



（ジルダが持参したフランスワインで合格の祝杯を上げる）

第 22 回刀道全国大会

2009 年 11 月 13 日

先日の八日、日野市の東京至誠館道場で第 22 回全日本刀道連盟全国大会が催された。

参加人数はこれまでの大会中一番多く百名を数えるに至った。百畳敷きの道場が、参加の剣士で溢れ返るばかりの盛況で、日本伝統文化の最右翼に位置する古武道剣術の隆盛が伺われる風景となった。

参加団体は九流派に及び、国際刀道連盟韓国大田支部から 4 人の参加があり、国際大会の様相を呈した次第である。流派名を列挙しておこう。

神道流居合抜刀術静岡正武塾、

神道流神尚館、

神道流居合抜刀術正信塾、

無双直伝英信流英信館、

国際刀道連盟韓国大田廣域市支部、

天真正自現流兵法総合武道源心会、

変應自在流、

荒木流拳法、

宮本武蔵円明流、

仏剣雲流兵法、

以上である。

今回の大会は、前回と異なる業が設けられており、ビデオによって参加団体に周知徹底されているものの、いささか戸惑いがあったのも事実である。

しかし各団体共によく研究されていて、巧拙はともかくほぼ正確に技が実行されていたことは特筆に価する。技を間違えれば失格であることは自明であり、優勝するためには正確な技の実行は必然であるにしても、各剣士に徹底されているということは清清しいことである。

午前十時に大会開始。まず規定刀法から始まり、午後からは据物斬り、各流派の表演、団体戦予選、据物斬り決勝、最後に団体戦決勝と続いた。

参加団体が多く、昼食の時間が取れないほどスケジュールが詰まっており、それぞれ次の参加項目に出場する時間と睨み合わせながら、慌しく弁当を食べるといった状況なのであった。

第22回全日本
刀道全国大会

今大会で目立った特徴は、＜据物斬り＞という種目が加わったことである。

刀道は体転ということを重視し、藁を敵と看做して体転して斬ることを基本としているが、抜刀道には体転という技が無く、目の前の藁を腰を据えて素早く両断することを基本とする。

他流派は体転を苦手とする所以であるが、そこに配慮して、一本の藁を七回に切り分けるという方法が新たに設けられた。

決められた方法で早く正確に両断した剣士が優勝というわけである。

その方法は、抜刀すぐに左袈裟斬り上げ、右袈裟斬り上げ、左から右の水平斬り、右受け流しを入れて右袈裟右から左の水平斬り、である。

ただ斬れば良いのではなく、早く斬らなければならないので、焦るあまり最後の水平で試斬台の芯を斬るという事例が続出。無論芯斬りは失格である。

誠

結局のところ、早く斬ろうとする人より、時間は遅くても確実に斬ろうとする人が優良な成績に繋がった。

しかも、三位まで勝ち上がった人は、審判長の林先生が提供する刀で優劣を競うという方法が取られた。刀によって斬れ方に差があってはならないという意図によるものである。

参加剣士たちは、この大会に合わせて寝刃を合わせあるいは研ぎに出して、よりよく斬れるように調整してきているはずであるが、使い慣れない刀を遣うことは一抹の不安があったはずである。その不安を払拭し、自らの刀法を遣いきった人が

勝ちを制する。

今大会の目玉にふさわしい見ごたえのある種目であったといえよう。

　かくいう小生は全ての種目に欠場、司会と審判役に徹する。文武両道塾のメンバーは今大会はお手伝いに専念し、次大会から出場する方針である。塾生全員めきめき腕を上げており、来年の大会が待ち遠しいほどである。

誠

再び秩父の刀匠を訪ねて

<< 作成日時 : 2009/12/05 14:35 >>

2009 年 12 月 5 日

すでに半月ばかり前になるが、文武両道塾生 6 名を伴って秩父へ赴いた。

紅葉は盛りを過ぎていたが、山と緑の多い風景は十分我々の眼を楽しませてくれた。

前回訪問した時に見学ということで同行していた塾生が今回刀を購入することになったのである。前に買った人も二人が二本目を購入する気でやって来たわけである。

前回同様世話をしてくれる N 氏が西武秩父駅に集合した私たちを待ち受けてくれていた。人数が多いので、N 氏の弟子の方もクルマを回してくれ、二台のクルマ

に分譲してまずは蕎麦屋へ。

昼間ではあったが食事にアルコールは欠かせない。ビールで喉を潤しながら、秩父蕎麦をいただく。

その後、一貫斎先生の鍛錬場へ案内していただく。

脚の悪い先生が玄関口まで出迎えて下さり、居間へ通される。前回にも増して、鍛錬された刀が新聞紙に包まれてたくさん揃えられていた。

隣の部屋の襖が空いていたのでふと見ると、真新しい仏壇がしつらえられ、花や供え物が飾られている。そういえば、前回の時には、病に臥せっておられたという奥様が挨拶に見えられ、お茶など供していただいたのだが、今回はお姿が見えない。もしや･･･と思いもしたが、案内のＮ氏も何も言わないので、言葉を呑んで購入刀の選定に没頭した次第である。

前回きちんと報告が出来なかったのであるが、刀匠は七尺を優に超える超大刀を鍛えられていて、それをぜひ今回初めて鍛錬場を訪問する塾生に見せたくて居間に運んでもらった。

写真でご覧のように、身幅は三寸（約9センチ）ほどある。香取神宮へ奉納されている直刀に迫る大きさである。藤埜一貫斎先生がいかに気宇壮大な志を抱いて作刀に励んでこられたかを見せ付けられる思いである。

購入者は眼をらんらんと輝かせて欲しい刀を選ぶ作業に余念がない。前回の購入者の一人は、重量のある刀を選んでしまったために、今回は慎重に重さを確かめながら選んでいた。ほぼ二時間後に三人の塾生が購入を決定。満足の笑みを浮かべながら、柄巻や鞘の色・形、鍔、縁・頭などをあれこれ詮議して希望をＮ氏に伝える。

刀匠宅を後にして今度はＮ氏宅へ向かう。Ｎ氏は現在自宅の敷地の一角へ道場を建設中で、ほぼ 8 割方出来上がっているとのことであり、そこで試斬させてもらうことになった。

トイレと着替室がまだ出来ていないとのことであったが、試斬に問題はなく、巻き藁 20 本ほどを皆で斬らせてもらった。初めて試斬する者もいて大感激の態である。

試斬終了後、母屋から娘さんが運んできた茶菓子をいただきながら、ひとしきり刀談義に花が咲く。

夕闇が迫る頃駅前の飲み屋までクルマで送っていただく。前回の時案内してもらった場所である。新しく刀を購入した人たちの高揚感もあって、場は大いに盛り上がった。研ぎと拵えが出来てくるのは二月後とか、私の刀ではないが、出来上がってくるのを一番楽しみにしているのは私かもしれない。

京ことば『源氏物語』 全五十四帖隔月連続語り③

2009年12月6日

昨日京王線明大前の「キッド・アイラック・アート・ホール」で表題の公演が行われた。

隔月ではであるが8月にスタートした公演は早三回目になる。初回はすでにアップしてあるが、二回目をアップしなかったのは、二回三回が同じ帖の続きということになっていたからである。

前回の「帚木（ははきぎ）」では、二条院に集う光源氏の側近たちが四名が、雨の夜のつれづれに女の品定めをする場面である。会席者のそれぞれが女を上中下の三階級に分けてあれこれと論じ合う。源氏はくつろいだ様子で話を聞いていた

が、中の品の女というものの品定めに興味を抱く。そこから三回目が幕を開ける。

　ステージに登場した語り部山下智子さんの端麗にして優雅な容姿にはいささかの曇りはない。

　一部と二部に分かれていて、一部は、これから朗読される巻のくだけた説明と粗筋である。現代ではありえないような内容にご本人が戸惑いつつも、古代と現代のギャップをユーモアたっぷりに解説するので、約50名ほどの観客からは笑いが絶えなかった。

　手渡されたパンフを参照しつつ粗筋を述べてみよう。

「ある日、紀伊の守の屋敷で一夜を過ごすことになった源氏は、たまたまそこに身を寄せていた紀伊の守の父伊予の介の若い後家のもとに忍ぶ。人妻であることなどを理由に恥じらい拒むその女性に源氏は新鮮な感動を味う。

　女性の弟の小君を手名付けて頻繁に文を送り再会を願うが、女性は会うことを拒み続ける。源氏は落胆の余り、女を、遠くからは見えるが近寄ると見えなくなるという伝統の帚木になぞらえる。

　若い源氏は、これまで拒まれた経験はないので懊悩し、ついに小君の手引きで主の留守を狙って屋敷に押し掛ける。女の部屋を覗き見ると、女は亭主の先妻の娘と碁に興じている。

　夜が更けて寝所に忍んできた源氏の気配を感じ、女は人知れずするりと隣室に逃れてしまう。それに気付かない源氏は同じ場所に寝ていた先妻の娘に触れ、目当ての女ではないことを知って愕然とするが、活発なかわいい娘でもあり、手を付けてしまう。

　このことは内緒にするように娘に念を推しておいて、女が逃れ際に寝所に残した

薄衣を懐に入れてその場から去る。次の夜源氏はその衣を懐に入れて寝屋に入るのである。」

女を取り違える等の滑稽な場面はあるが、粗筋だけを述べると若い貴族の野放図な女漁りとも取られかねないが、振られた源氏はそれなりに悩むのであり、自分のそうした立場が滑稽にも感じられ、ちじに乱れて懊悩する様は、恋をする青年の姿そのものである。

京ことばに翻訳された宮廷の雰囲気は、緩急と声音を変えた語り部の物語構築の豊かな想像力に支えられて、見事なまでに再現されるのである。解説している時と、語りを行って時の表情と口調はがらりと変わり、まさに想像の世界の住人となっている。

目を閉じて聴いている私はときにうつらうつらとして夢の端境を漂い、頭の片隅に甘く響いてくる語り部の張りのある美しい声を受け止めながら、現実と夢の世界を行き来するのである。甘美な体験というべきか・・・。

この三回目から司会者が登場し、解説を行ってくれるのは結構であるが、終了後の懇談会で司会の役割を若干逸脱し、自分の感想をとうとうと述べる場面が目立った。司会者は言葉少なめに質問者の指名などに徹底し、主人公の語り部や観客の発言に多くを語らせるべきであった。

それにしても、いくら古代とはいえ、妻がありながら好きなように複数の女性と関係を持つことが許される源氏の境遇を、心から羨ましく思ったのは私だけではあるまい。

もし日本を日本人の歴史と伝統を見直そう！という機運が高まった暁には、キリスト教の西洋文明が入ってくる前の生活風習をぜひ見直したいものだ。